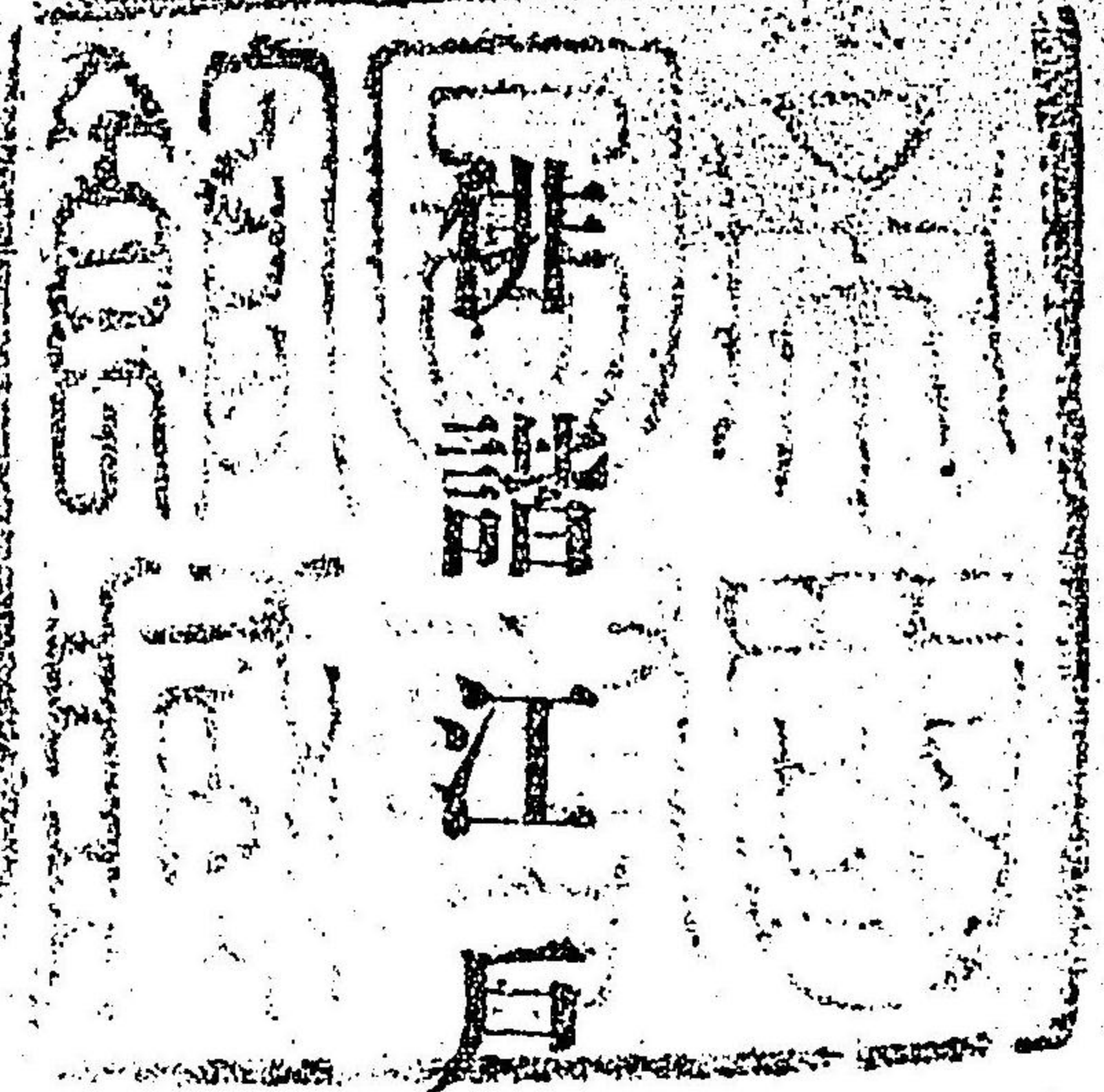


特63
806



調

小 熊
泉 谷
迂 無
外 漏

綸 綸
44. 8. 12
內 交

無漏兄

新といはず、舊といはず、突つくるめて今の俳壇は通人に乏しい。通人がすくないから自然に俳諧の江戸趣味は漸次閑却されてゆく傾がある。ト僕は思ふ。

子規子が明治の新風を唱導して以來、天明の古調が復活され、元祿の資料が探究されて、著に、談に、もはや芭蕉、蕪村の講釋なら容易に聞く事が能さる。牛鍋に箸を突き合ひながら、や

れ客観の、主観の、抽象美の、具体美の、何に傾向の、ト云ふ
科學的に俳諧を作る先生方てさへ一通りの説明はする。

しかし江戸坐に及ぶと、なぜか多くは其論をおさめ、筆を擱
いて、其攻究を手輕にせぬ。

先輩（ト爰には假によんで置く）の江戸坐觀は總じて甚だ淡冷
である、かに思ふ。

江戸坐の生命は洒落である。輕妙である、俳諧を娛樂文學と

して、ノンキに弄ぶ僕等から見れば、洒落と輕みを生命とする
俳風は全ての點から割出して、俳諧に於ける大乘の趣味である。
ト思ふ。

文學上から定義を下して論じたなら、江戸坐の眞價は零であ
らうけれど、僕は樂天的の眼鏡を懸けて、飽く迄江戸坐の高超
趣味を説きたい。或は自派擁護と云はれるかもしれぬ。

岡田三面子が柳句の

惜しいかな洒落の解らぬ男にて

が幾人寄合つても、其角、沾徳、湖十、紀逸、存義、屠龍（抱一）等の講釋ならちよつと面倒である。むづかしさうである。

けれど徳川家時代の風俗、言語を少しでも聞き嚙ぢつた（通曉せぬ迄も）人ならば、容易に江戸坐の妙味は會得される。ヨシ會得されない迄もフン、ソーカの程度ぐらいにはゆく、ト思ふ。

(4)

無漏兄

兄は今の俳壇を通じての江戸通である。兄の廣趣味は俳諧の外、歌舞、音曲、遊里、食味にまで、その探査が行涉つてゐるしかも純江戸の血を享けてゐる東京人である。

江戸坐の攻究を兼ねて、新江戸坐の開拓は兄に待つ處が頗る多い。

(5)

無漏兄

もし此の著が手引となり、素因となつて、再び江戸趣味が復活され、此側の俳客が續出して、横縦に俳壇を洒落飛ばしたな

ら、極めて愉快な事だらうと思ふ。

五月盡日

淺草銀杏ヶ岡にて

迂

外

凡 例

一 本書をものしたる趣意は、蓋し遊俳主義の方針より現代的の新傾向に觸れず、所謂新味に囚はれず、古風な江戸前の俳味乃至江戸氣質の流露せる江戸趣味の句帳を論成したもにて恐らく此集を序開として、他日追加増補する心得なれば、博雅同好の諸賢は、何卒御賛助御引立の程を偏に希ふものもある。

一 本書は、徒に句數の多きを望まず、苟も流行にかぶれず、單

に江戸式俳句の作例を示すを以て、趣向目的としたので、便宜上江戸八百八調と題し、即ち八百八句に制限したれど、故人七分今人三分の標準に依り、撰輯録したのである。

一本書は、四季に分類し、天文、地理、時候、人事、動物、植物の六部に別ちて、順次排列したのは申す迄もなけれど、態と題名は畧すことにした。

一本書を編輯するに當り、先輩たる雪中庵雀志宗匠、岡野知十先生、菜窓無角宗匠、堀野文祿君、小泉迂外君、諸氏の御示教御援助を忝ふしたる御芳情に對して、謹んで其光榮を感

謝する次第である。

一本書の出版に際し、特に小泉迂外君は、選句上並に其他の内容等に就き、終始懇篤なる注意と同情を以て補助せられ、尙且御多忙中なるにも係らず、序文をものせられたる御厚意を幾久しく御禮申す次第である。

明治辛亥初夏樽正町の假宅にて

編者識

俳諧江戸調

目次

所謂江戸趣味の前觸	一
俳諧江戸研究	一〇
俳諧と諸侯	二
俳諧と出板物	五
俳諧と町觸	五
俳諧と名所及所名	七〇
俳諧と豪商及通人	七四
俳諧と江戸めぐり	八七

俳 諧 江 戸 調

▲所謂江戸趣味の前觸

江戸趣味が廢れたつて、自分の影響ぢやなし。何も今更らし
 く追憶し憧憬し未練や愚痴を述べる譯ではないが、尠くとも過
 去は美はしく観ゆるものであると信じて、聊か蛇足を添へて置
 きたい一念が發起した。

蓋し江戸の俳諧趣味を説く前提として、少しく概括的な所
 謂江戸趣味に就て云々して見たいが、一體趣味てふ事は云ふべ

俳諧と花街…………… 110

俳諧と俳優及劇場…………… 113

俳諧八百八調

新 年…………… 114

春…………… 115

夏…………… 116

秋…………… 117

冬…………… 118

くして、恐く徹底し難いものである、目で見るとは、多少美醜大小高底などが分るから、覺束ないながらも通らしく知つたふりも出来るが、耳で聞くものとなると、少と桁が違つて來るので、江戸趣味を謳歌し江戸ッ兒を以て任ずる人が、随分清元と常磐津の區別が付かなかつたり、河東一中が何處が眠くなるのか、一向に御存知がない。出直して川柳から研究する杯も、後の雁が先ではあるまいか。

何アに耳だつて甘エもんと、『梅の春』や『嗟峨や御室』は落語家の前座でさへやるのだ。抑も月謝を拂つて稽古所の格子

を這入れれば、冒頭から『自然居士』を教へて呉れるのサ。一押二金のお約束で、一品八錢の輕食を喰ひ、下宿屋のつま楊枝を喰へた其口で『吉原八景だつて樂なものさ』は恐れる。況んや無精者が人の唄ふのを聞くのは、朝飯前よりも安直専門であらうと思ふ。

だが然し、さうは問屋で卸さないのは、食味の通てばあるまいか、旨い物屋を心得て居るのは都會ッ兒の本領である。若し夫れ純粹の江戸ッ兒に、尤も誇りとする急所を聞いたら、矢張り食物の通を列べるに極つて居る。

重箱は焼けたが山谷の八百松は残つた……といふ大それた記事をのめくと載せる新聞もある世の中だ、島村を論じ中華を説き、水神を語り常磐屋を談ずる人も澤山あるが、先づ兎も角も栗山善四郎を訪問せぬ内に、蜆汁や金ぶらを説いた所で、餘り自慢でもないと思ふ、魚河岸の屋體のすしは、黒人筋では問題外としてある。花村の通を云ふ者に至つては寧ろ異常を呈してゐる物で、これ等は所謂變通といふべきであらう。

要するに、江戸通、江戸趣味を語らんと欲すれば、音曲の耳、食味の通、是等を研究する必要があると思ふ、が、是等の通と

か趣味とか云ふものは、元祿以後の大平の世の中に、醗酵されたものであるから、大抵狹斜の範圍に大關係を持つて居る。

否、それ等花柳界で醗酵したものと云つても過言ではない。當時伊達を競つた白柄組も廓通ひに浮身を糺した。例の幡隨院長兵衛の様な大江戸がりを初め、此社會に耽溺したのである。十八大通は勿論のこと、遠山左衛門などといふいさな名奉行も、以前は猿若町のお囃し部屋へ刀を掛けたさうな。

『鞆當』なぞで徳川時代に於ける、武士と武士との衝突を吉原に持つて行つたのは、風俗史とか文明史とかの上から、多少考ふ

べき事だと思ふのである。

蓋し、江戸音楽で狭斜趣味を離れたものは、江戸半太夫の昔から富本、清元、常盤津に至る迄、中には随分甘口な、大味な、牡丹櫻へ味淋を打掛けた代物もないではないが、尠くとも粹な皮肉な通な、話せる賣人を主人公として居るではないか。食味などもさう云ふ範圍で發展し研究された物が夥しい。例の『黒手組の助六』に出て居る紀文の言草にも、『金子と迄は行くまいが、五十軒の油玉で……』と云ふ様な事が言つてある。淺薄な例であるが連想は附くと思ふ。

兎に角當時の江戸作者は、江戸の通人を寫さんとする時には、多くは食味に關した事を、無理に云はせやうと努めて居る、何しろ此式で育つた江戸の通、江戸の趣味——是を解するには、是非共花柳界に交渉聯絡を持たなければ不可能である。

餘計な話だが、江戸の通を振廻し、江戸の趣味を追憶憧憬する人があらば、まだく狭斜の巷、花柳の境に、交渉關係を持たなければ要領は得まいと思ふ。寄席や月謝では細微な皮肉な濫い通な江戸趣味が分る筈はない。狭斜趣味を知つた後でなければ、分らぬのが江戸だ、江戸の趣味である。

恐らく宵越の錢を持たぬと自慢して居る舊式の江戸ッ兒が、自分勝手に拵へた定義を、千古不易の格言のやうに珍重して、何でも江戸でげすと額を叩くが如きは、野幫間のそれで誠に智惠の足りない研究法ではあるまいか。

自分みたやうにわからずやのぼくねんじんてさへ、なしくづしに随分齒の浮く様な事が多い當世だから、立派に諸事萬端の趣味を解し、本當に社會の多方面に通じた人には、さぞや〜立切れないで居らるゝ事と、精々お察し申す次第である。

一時元祿々々と大流行であつたが、思ふに元祿は張り詰めた

調子の一時にドツと、引き放つた時代であるから、戦後の反響が尙且市川流の荒事や、金平淨瑠璃に依つて代表された豪放闊達にのみ走つた。自分の所謂江戸趣味は、安永天明の復活から剛柔能く調和されて後、進んで輕妙な瀟洒な滋味のある尤も圓熟した、文化文政の兩度を以て、江戸趣味の發揮し完成された高潮であると信ずる。

自分は、あらゆる方面に於て江戸氣質の發展され、花街中心の全盛期である、化政度本意の俳味を鼓吹する積りであつたが、それでは餘り極端でもあり、徹底しない點があつては申譯がな

いと思ひ、順序として江戸趣味俳諧の徑路、一般的形式内容を以下附加る事にしたのである。

▲俳諧江戸研究

天正十八年庚寅八月朔日徳川家康が江戸に入城したが、四方芦沼或は原野にして、往時道灌入道の詠歌、今猶俤をとどめた、稍慶長八年癸卯に至り、江戸町割の命はあつたが、市井一般整たるに非ず、されば雅として見るべき物更にない、同十二年に、近衛關白信尹卿下向在て、

來て見るに、むさしの國の

江戸からは北とひがしの、角田川なり

爰に初て、江戸名所と云ふ名が起つた。

次に元和二年に羅山先生、丙辰紀行著て、淺草と云ふ所に正觀世音在を、江戸外の人も知に至つた、次寛永度に源通村卿、又烏丸光廣卿下向在、其折

いひしかば

江戸にて、人にあひ侍りしに、富士にて歌はよみつやと富士のねはみしやいかと、問ふ人に

我^{わが}こたふべき、ことの葉^はぞなき 通^と村^{むら}
〔駿河^{すまが}の名物^{めいぶつ}を、江戸^{えど}の景物^{けいぶつ}と爲^したは、此歌^{このうた}こそ最^{もつとも}興^{あつ}つて力^{ちから}
あるものである、

春^{はる}ならぬ、木の葉^はもうるふ、むさし野^の

末^{すえ}までかゝる、露^{つゆ}の恵^{めぐ}みも

光^ひ 廣^{ひろ}

此^{この}鳥丸殿^{からすまるでん}の御道^{おみち}の紀^きを、(春^{はる}の曙^{あけぼの})と題^{だい}して、著^あれた、前^{まへ}の丙辰^{へいしん}
紀行^{きかう}と、もに、江戸^{えど}に花^{はな}を添^{そへ}られた、之^{これ}に先立^{さきた}て寛永^{くわんえい}五年^{ねん}に、
齋藤^{さいとう}徳元^{とくげん}(美濃^{みの}國^{くに}岐阜^{きふ}の士^し也^{なり}後^{のち}醫^いを業^{げふ}とす)來^{きた}つて、馬喰^{ばくろ}町^{ちやうめ}二
丁目^{ぢやうめ}に居^きす、此^{この}時^{とき}關東^{かんとう}下向^{げかう}の紀^きがある、

むさし野^のの雪^{ゆき}ころばし歟^か富士^{ふじ}の雪^{ゆき}

江戸^{えど}にて、富士^{ふじ}の俳句^{はいく}は、之^{これ}等^らをはじめてあらう又^{また}(俳諧^{はいかい}初^{しよ}學^{がく}
抄^{せう})を編^{あみ}て上梓^{じやうし}した、之^{これ}江戸^{えど}に俳書^{はいしよ}の著^あらはれ、著^あたる最^{さい}初^{しよ}である、年^{とし}
經^へて高島^{たかしま}玄^{げん}札^{はつ}來^{きた}る、(伊勢^{いせ}國^{くに}山田^{やまだ}の之^{ひと}も醫^いを專^{せん}業^{げふ}とするかたは
ら俳諧^{はいかい}を教^{をし}ふ)本町^{ほんちやう}四^し丁目^{ぢやうめ}に住^すて居^ゐた。

名^なを得^えしや居^ゐながら富士^{ふじ}に雪^{ゆき}うつし

の句^くがある、これは狩野^{かの}守信^{もりのぶ}が、富士^{ふじ}の繪^ゑに賛^{さん}をしたもので、
句意^{くい}さもあらうか、猶^{なほ}正保^{しやうほ}三年^{ねん}にいたり、神谷^{かみや}季貞^{きせい}(秤屋^{はかりや}善四^{ぜんしよ}
郎^{らう})と云^いふ、徳川^{とくがは}氏^しの秤用^{はかりよう}達^た也^{なり}(江戸^{えど}町^{まち}盡^ま百^{ひゃく}韵^{いん}を獨^{どく}吟^{ぎん}して、齋藤^{さいとう}徳^{とく}

元に撰評を乞ふた、之は當時町名在も錯雜して衆人に分明せず、依て此一卷を自書して、友人に分ちたものである、江戸町盡案内とも云べき物の初であらう、同五年二月に安と教元すれば此折に、

改年の御慶安穩の天下かな

半井 卜養

此人は狂歌に名高い、俳句も父温野慶友より傳りて、善爲たのである專業は之も醫にて、徳川氏に召れて、法眼に昇進した、拜領の屋敷が在て、鐵砲洲明石町に住て居た、江戸にて、年號を俳句によみ初たのは、これ等であらう、

此頃江戸にては、石田未得(狂歌にも名高い、神田鍋町住後相州に隠、又日本橋兩替町にも住せしと、之も醫也と在)高井立志(本町四丁目住)など最道に盡した、以上の俳界は眞に穩てあつたが寛文に至つて、西部の大將とも云れた、西山梅翁(宗因)來る、其前門人田代松意(大和の人大阪に住)密に下向して俳況を鑑み、江戸の居眠俳諧を、一驚させんと、茲に師を招て、談林の旗を擧たのである(松意日本橋鞆町に住、梅翁も此處に滞在せしと云)

物珍らしきを好む江戸の人氣、當時最早在しと見えて、八方よ

り好人集合して遂に佛門の十八檀林にならひ、江戸談林派と唱
る一種の團結が出来た。

さればこゝに談林の木あり梅の花

梅

翁

此句を巻頭として、十百韻を興行し、後上梓した、爾來續て此
種の俳書、日に月に著た之寛文延寶天和間である、此二年に梅
翁歿すと雖、門人未だ勢ひ挫ず、根城たる浪花にかまびすしか
つた、當時北村季吟洛に在つて、此徒の蔓をひそかに歎めて居
た、門人山口信章後素堂、松尾桃青と圖て、曩に桃青に東下を
なさしめ、わざと談林に入派せしめしは、季吟が先見のある所

である、(寛文十二年)同時季吟幕府に召るも、頓に歸洛して、
再び元祿二年に召出されて歌學所を承はつた、後法橋に任じ
て、晩年江戸に終つた、故に正風の名江戸に轟しは元祿を以
て專とするのである、前貞享三年に、桃青古池やの吟を發すと
ともに、談林を看破り、茲に真正の俳道をあらはした、之傍
には、素堂在て補佐し、羽翼には其角嵐雪が隨つた、百事は杉
風が取賄つて、衣食住は足りて居つた、如斯順次なれば、俳
諧と云一物、江戸を舞臺にして、西より來つて開發したのであ
る、此時代江戸ツ子と云名、未起らねば、專賣の負嫌ひもなく、

所謂強い者勝とみえたが更に江戸の俳諧といふに對して、一言
したいのは、先盛時元祿を中央として、前後俳道の豪傑を擧る
と、割合に江戸ツ子の僅少の事である、元祿前は正に江戸の俳人
と見極る者、四五名に止り、後は即ち、蕉門十哲と唱るに至て
も、左の如きものである。

芭蕉庵桃青

(伊賀の人身分は士)

寶晋齋其角

(江戸の人元醫)

雪中庵嵐雪

(淡路の人農より出て士)

落柿舎去來

(肥前の人醫より出て士)

佛幻庵丈艸

(尾張の人士より出て僧)

獅子庵支考

(美濃の人初は僧)

五老井許六

(近江の人士)

探茶庵杉風

(江戸の人商)

鳥翠臺北枝

(加賀の人工)

樗木社野坡

(越前の人商)

負山子越人

(肥後の人士)

此他當時江戸に名高きは

今日庵素堂

(甲斐の人儒)

太白堂桃隣

(伊賀の人士)

冥靈堂一品

(京都の人醫)

一柳軒不卜

(江戸の人士)

合歡堂沾徳

(江戸の人工)

以外にもあるが、江戸に關係薄ければ、畧す事とした、偕如
上の次第で察するに、元祿は、江戸ツ子俳諧の見世開で、此人
達が充分賣込で、得意も、出見世も、代物もこしらへて、次の
人、即ち二代目へ渡したので、其餘光を寶永正徳享保と、順に
子孫が戴て、間に盛衰は在たが、約り無怠道に勉たから、

今日の繁昌を見るに至たのであると思ふ、そこで人種を別ると、
第一が士である、これは花は櫻木人は武士と云道理で、何事に
も先達する身分故にさもあらう、次に醫僧神官商工農、別座と
して婦人とも云べき順である、是に依つて江戸俳諧の關係を述
て見やう。

▲俳諧と諸侯

當時の習慣として、容易に名を表さず、其藩限り密に俳筵を設
て、出版の集あるも、非賣品にて他にわたらなかつた、されば

某侯は誰々を召て、安藤冠里侯備中國松山の藩主で、これへは晋其角伺候するの類にて、俳道を好まる諸侯には、師と唱ふる外に、親敷出入する、俳人三四名は必在て、それに隨ふ分家及臣下も、其師に入門すと云傾向で、上の好所下におよぼし、遂に一藩擧て俳人となる例も在て、それが數藩に至り、又旗下或は直參にも同様故に、江戸の俳諧は、過半武士の占る所に成つたものである、月雪花四時何々の御催が、幾日に在さうだと云に止つて、平の俳諧を好む者には、伺知事不能て、名吟在とも外にもれず、唯市中にて出版する集には、俳名一字上

りて、身分を別つのみである、邂逅名前を見るも、何所の藩主やら、不明にて、俗に云わからずじまひに成行て、遺憾ながら是非もない其中に明治の代迄も分明してゐるは、内藤露沾侯は奥州岩城城主、後日向延岡城主である、下野守義英、西山宗因即梅翁で號を遊園堂又傍池亭と云つた（是は江戸屋敷虎の門溜池に因つたものである、侯の手留は、大判岩城紙に達筆大字で堂々として、その中に、

晋子母の身まかりける追悼

卯の花に目の腫恥ぬ日數かな

池西言水武藏に下りしに土産とて

はるく、かの六玉川の遠きは傳へ聞ばかり成しを、今め

なれぬ繪といひおほけなき賛といひ、目の前にして野田

の沙風も猶人まつのみ

その流れ繪の外見せんみそさとい

雪の八つ山問へば一番

言水へ餞別

言水

すげなしや名古曾見捨て冬牡丹

雪中庵嵐雪追悼

繩床の指に跡なし玉あられ

雪中居士が過し木葉月も

一周忌とて

残れた襟の影見む菊の原

稻津清流近き頃より身をやすふし、豆州桃園定林寺宗

祇の古墳に至りて、落髪のよしを聞て

鬚の香にうつれ野服の霞笠

(清流後に祇空)

天々軒芭蕉翁年回

蕉翁の手馴し檜笠は浪花の茶店に残し置とや

芦間屋のせめて笠見ん霜の跡

沾の一字拜領す誠此道の本望このもかもの陰よりも

十分にうるほふ空や夏筑波

卵の花の鳥萬代の愛

白浪の蝟の碇のふれくして

沾

露

枳

風

沾

涼

以下略

當時名家と呼ばれし輩、おほむねは伺候せし旨、此手留に見ゆ、唯侯の他に勝れたまひしは、身歴々におはしなから、いみじく

も門人に名家を出されしの一事で、尤父君は左京亮義泰、俳には風鈴軒風虎とのたまひ、宗因門とも、又は師は不知とも著書に(夜の錦)(信太のうさ島)(さくら川)等である、貞享の初に歿した。

されば、露沾侯と二代の俳家にてあらゆる書物にわたり、既に俳書掛を特におかれたと云事である、歿時享保十八年迄一日も吟ぜざる日なしといふ程で、此門より出たのは、福田露言、水間沾徳、菊岡沾涼、赤萩露牛、寶生沾荷(後此人二代目立圃に成つたが、侯の命なりしと云、尤初代雛屋立圃の外孫にあ

たるからである、此他に露又沾の字を冠りて、判者なりし者數名にて算へがたい位だ。

安藤冠里、侯は備中國松山の藩主、當時長門守後に奥州岩城平の藩主で此候俳事上には、内藤露沾侯と好一對の御手際で其角とは關係最深く、角が五元集中に。

冠里公御わたまし祝奉りて

初雁や臺場ははれて百足持

其 角

冠里公備中松山初入の時

川と暑や浦の苦屋の軸うつり

同

點印半面美人の字を彫て、琴形の中に備へタルをはじめて、冠里公の萬句の御卷に押弘侍るとて

春の月琴に物書くはじめ哉

同

此萬句の御卷といふ、その初に曰はく

元祿十四年、公一萬句の高點を再拔萃清書し、晋子に點印及加筆まで、源卷のまゝを寫させし也、此拔萃卷全十卷、こはその中冬の部二卷、ところ／＼加筆あるは、其角が自筆にて、三十一筆在、朱を以てこれをわかつ云々、

偕此中公の取給ひし、半面美人の押印在句二三を記して見やう、

前句 危相な膳も奇麗さに出すと云に

斧琴に頼き初し木芍薬

前句 慰によむ山吹の蕊と云に

瀬枕や流れて春も表警女

前句 鼻のかけ聲を聞く鼓山と云に

御輿ハ疾クに靦く苦賣

(カタカナは原卷のまゝである)

前句 潦より殖し蚊の群レと云に

楯に成ル小君を洩れて藤袴

其角筆也

(やり水のめいほくよりぞ)

前句 鳴子て人を使廊殿と云に

(亦吸物にとの高吟有)

前に同じ

焼食ハ本に吞込放下僧

末紙に

(まだ在も畧す)

總計

殘考

八百七

麗人

九十二

五字

三百三十一

參 雙 雁 屯
字 字 字

七百二十二
千三百十九
千九百二十五
二千九

寶晉齋其角

其角は人の知る如く、數部の俳書を著したが、過半は侯の名が見ゆる中にも（類柑子）に多い一二を掲ぐれば、

改元の祥吟

ことし三月正當三十日

御城に於て革命改曆の御よろこび申あり、出仕各午の

上刻

寶永の裕にかはれ米の霜

同四年二月角歿するや、侯卒先して追善の百韻がある、

一朝の夢解たりしぬしもはやく夢中の客となつて、風輪に清香を起し水相に月をゆりすへ、枕の下の有明も自由を辨じ自在を述かの夢裏の雑談をとじて

したひて一句を投ず

百韻

花の雨胸は板間を裂夜かな

冠里

梅黒しとて母を召るゝ

秋色

蠶には言葉おろさず懇に

嵐雪

以下略すも、當時有名の、枳風、岩翁、清流、千山、大町、百

里、白雲、沾洲、沾徳等連衆三十餘名である、末に、

右百韻四月十八日深川泉龍院にして、七七日の追善各

満座百ヶ日

冠里

猶、享保四年、其角十三回忌に、類柑子を再板して、之に紙敷

蓮に赦は百日の鯉をこたらず

十枚を殖し、秋色、貞佐、沾徳、沾洲等の追善歌仙其他が在る、

花前とげて跡吊ふ野末かな

冠里

侯と角との中、不容易は思ひ中に過ぐるものがある。

土屋都文侯。當時主税と申されし、是又元祿諸侯中一己の俳人

である、委敷事實世に傳はらず、殊に同年度中最も名高き、赤

穂事件（俗に忠臣藏）に關して、談柄はあるが蛇足にして真に

遠いものだ。

近時嘗て永機叟の著した「温古」といへる冊子（同叟先考の追

福、其他近遠の因みをのせて、親しき知人門下にのみ配付せし

もの、故に至つて少い中に、はからず實事を得たから、侯の
俳事と、もに、此眞の後々迄、遺らむことを爲念こゝに抄す、
且は叟の道に切なるをも感謝するものである。

元祿十五年十二月十四日、内匠頭淺野長矩朝臣、臣大石良雄
等、四十七人相與謀、爲君其君報警夜襲吉良朝臣

吉良家の隣屋敷は、土屋主税君なり、此日俳諧連歌の催あり
て、其角嵐雪杉風主人都文君、そのあらましは、十二月廿日の
文通、秋田の文鱗への手紙世に流布せり、文中庭中の櫻杉は、
雪をいたゞき、雲間の月は、晴間を照し、風興捨なくして、夜

はいたく更行まゝ、嘶も止折靜なり、文臺料紙片よせ、四五人集
り、蒲團をかつぎ、夢のうき世といふ、間もあらず、けはしく
門をたゞくもの兩人、玄關に案内して、我等は淺野家の浪人、
堀部彌兵衛大高源呈にて候、今夜御隣家、吉良上野介どのやし
きへ押寄せ、亡君の遺恨を果さんため、大石内藏之介始四十七
人、門前に相々み唯今吉良氏を討亡し候間、近隣のため武士の
よしみ、萬一御加勢も候はゞ、願はくば、門戸をさびしく御防
火の元御用心被下候はゞ、某等大慶に存候、その風情神妙なる
事言ふべくもあらず、今は悲も消失て、其角幸ひこゝにあり

生涯しやうがいの名残見んと、門前もんぜんにはしり出れば、各吉良家へ忍入申候しのびいりまをし

我雪わがゆきとおもえばかるし笠の上かさのうへ

其角

かゝる文通世ぶんつうよに残れども、その夜の連句れんくはさらに知る人なし、年としごろいかにしてとおもひ煩わづらひしに、今いまを去ること三十四五年のむかし、土屋つちやうねめの頭かみどのの臣しん、山岡秀蘿やまおかしゅうらといへる俳士はいし、その夜の歌仙かせんを持たれば、ひそかに寫うつしおきをはんぬ、我わがうへも覺束おぼつかなければ、書得かきえて草庵さうあんの紀念かたみとす、

元祿十五年十二月十四日興行

橋はし一とつ遠とほき在所ざいしよや雪ゆきげしき

都

文

もつ手て藁わらむ酒さけの大樽おほたる

其

角

よめねども貧ひん交かう行ぎやうをよく知しりて

嵐

雪

只ただ廣ひろきのみ宗鑑そうかんが家いえ

杉

風

夜寒よさむさの目めに付つくものは月つきの反そり

角

ざくりくくとをしね荊かんなり也

文

少御遷宮ごせんぐうをが拜をがみに八田やたの人ひと通り

風

子こに番ばんさせて小商こあきなひする

雪

機糸はたいこのかう切きれるのも何なんぞやら

文

軍のたより夢にさへなし
 朝鮮は驚の木ある暑さにて
 諏訪の土用の布子也けり
 山伏の首途送る朝月に
 焼米焚てもてあましぬる
 治りの付ぬ野分に寝もせなん
 鼻持篋の入る病なり
 咲うはさ散うはさ花は脚早く
 沙もどりする舟も寄居虫

角 文 雪 風 文 角 風 雪 角

寶引の負が攤打におしうつり
 味噌の外見ぬ僧の肌ぬぎ
 杜若さらんとおもふ花遠し
 御詰ひとり前さにももの申
 初時雨合羽もたぬを嬉しがり
 二文渡しの永くまたせる
 梅若の亡者を見しは能ばかり
 豆腐さかなに腐儒の謔言
 掛乞も内儀が出れば和らかに

雪 角 文 雪 風 文 角 風 雪

女蛇の目を面伏にかる

形代に節折にけふの祝なり

晦日に月のちく夜あらまし

サ臈楫さへよくば乾坤一廻り

狭い借家に同じ夏冬

春秋は旅に藍賣渡世して

めしくふ時は花見なるらん

若草に居付ば崖の跡下り

こまかき露は蝶の小便

風 雪 角 文 雪 風 文 角 風

初時服手にしだり尾の抱こゝろ

兒輩みな官位たまはりて、此春は直垂狩衣、ほこらかに

そろそそ初春の壽き申さんとて、此山里へもうち連つゝ

來れるさま、

御めぐみの身にもあまれるを、よろこび謠ふ

子寶のいはれとけたりけふの春

我が上館は、西は日吉山王のしげみ深く、愛宕の山の梢

より、南につづく

ほととぎす雨の火の見の如意が嶽

此他元祿より享保前後まで、一廉の俳士たる諸侯數名在も略す
事とした。

松平米翁 侯は和州郡山の藩主、雅號を月村所又紫子庵、初米
徳後府下染井に隠逃せられて、蘇明壯年春來軒初世青峨の門に
入、後八樂庵米仲に就いた、享保年間より天明頃までの俳書に
は、侯の名邂逅見受る、著述もあられし由なれど、門外に數不出、
(染井山莊發句藻) 稀に在る句の作は、いかにも御地位の程を
はかられる。

かはらず君恩をいたどきて

染井の山里へ退隱の後、草村ごとの虫の聲も、ありから
の情にかなひ、心すむ幽居のさまも、太田持資の詠吟に
は事かはりて

海遠く松原近き月見かな

夜座自閑

行年に古めき人の薄茶かな

延享 寛延の頃は、米徳拾翠屋水甘棠鸞臺清秋と、花に
むつび、月に語らふ、友どち六人なん有ける、鸞は早く
飛去り、棠もいくほどなく、常なき風にちり行、水翠の

二人も終に泉に歸り、今や米翁とやつがれとのみぞのこ
りぬ、齡もあなじ友千鳥、北に南に登れども、裏なき心
は明暮行通ふて、互に額は渭濱の浪をよせ、眉に商山の
霜をたれ、腰に梓の弓ははれ共、俳諧の矢たけ心は、か
たみに替らずなむ有ける、今年此翁の年月つめる所の發
句を、息の殊成櫻木にさざみ紙に押て、世に廣くせん
願ひを、ゆるされせちに物したまへば、孝心に驚かされ
て、

先見たさ校合ずりの一葉かな

清秋

鷺のかつらにうそくらき窓
露の月虫すらすだく所得て

珠成
米翁

(三吟一歌仙あり略)

跋 此十年餘り、八重櫻奈良の古郷を離れ、夕紅葉染井の隠家
に世をのがれ、風流三昧を己が役とし、春の雨の蠅め難さも、
秋の夜の寢覺がちなるも、口重くなほしくしき發句をうめきて
老らくの至るをもしらず、物の端にそこはかとなく、書集し句
々の、いつしか塵泥と積りぬるを、物の序に例の珠來に見せて、
是が中に浪花の濱のあしきを捨、伊勢をの浦のよきを、撰てよ

と屬しぬれば、日ひを撰せん定ぢやう終しゆうりぬとてかへしぬるを、五郎ごらうなる
珠しゆ成せいらが、世よ籠こもり埋うもれんもやくなしとて、勸すすめぬる程ほどに、世せ上じやう
の譏そり笑わらをうくる媒なかだちとしりつゝも、櫻さくら木ぎにちりはめはべる

甲辰きのえたつの夏なつ

桑門さうもん米翁まいおう

此この他たに（俳諧秋の寐ねざめ）などは、侯こうの著述ちやしゆつちゆうい中ちゆう有ゆう益えきのもの
とおもはれた、將はら三さん吟ぎん立たて句くの（清秋せいしゆう）とあるは、勢州せいしゆう神戶かんべ
の蕃主はんしゆほんだ本多よみ隨翁すゐおう君くんで、號がう長ちやう月げつ庵あんといはれ、子息しそくを其き香かうとい
ふ、父子ふし相あひ著述ちやしゆつちゆういのもの折節せりふし見みゆ、中なかにも父子ふし兩りやう吟ぎんの（日ひけ
し壺つば）など最興もつこもきやうがある。

真田さなだ菊きく貫くわん 侯こうは信州しんしゆう松代まつしろの藩主はんしゆで號がうを白日はくじつ庵あんと云いふ、初はじめ一まん萬ぼう坊ぼう菊きく
堂だう後のち雪せつ中ちゆう庵あん蓼れう太たに道みちを問とひ、別號べつがう吟ぎん松しょう庵あんといはれた、寶曆ほうれき年ねん間かん
より寛政くわんせいまでの句くもつこもおほ最もつこもおほ多おほい、上板じやうばんの著述ちやしゆつちゆういはないが、御手許おてもとぞなへ
の（水みづかゞみ集しふ）三冊さんさつがある、天てんの卷まきは一代だいいの句集くしふら地ぢの卷まきは、
前記ぜんき米翁まいおう侯こうの句集くしふら自筆ひつさう艸稿そうかう、人ひとの卷まきは知人ちじん及およ臣下しんかの肖像せうざうに句く在あり
て、何なにさま權門けんもん家の文車ぶんぐるまにのりしものと見みゆるものである。

初東風はつこちや萬國ばんこくの圖づも日本にほんより

ほととぎすいつの幾日いっかのゆべかや

松まつむしや三谷さんやの左ひだりり土堤つての右みぎ

萬兩の藏に闇なし大三十日

かりに四季を抄した中にも萬國の圖の句は、大名の調にて不易とも可申歟、此外に松平不審侯、松平天府侯、安藤婆心侯、京極大虎侯、松平青牛侯、土井漣漪侯等皆俳道に勝れた人で、大名藝とは受とれぬ名吟が數多い、抑江戸の俳諧に道をひろめたのは、内藤露沾侯にはじまり、道の爲に光りを添られた、且力られしは毛利露朝侯である、萩の太守で、號を三夕堂と云つた、六世深川湖十を師として、御隠居後はますます俳を練られた事、湖十机上録に分明せるのみならず、世人もうかゞひ知る所である、著述（花むしる）に、

狭くとも我百敷を花むしる

露朝

これには跋も添られて、文事に唯ならぬを思はれる、これは文化十三年の上板にして、後天保五年板湖十句集中に、

長州の太守へ除夜に候しけるに、白鷺一羽御捉飼のとて

賜ければ、

御配りに雪の貢をこよひかな

湖十

と申奉る即興なりけるを、頼に脇申さんとして、

探て二もく梅の白勝と、露朝公遊し賜りける、とある、

侯と湖十との間に、種々の話あれど別問題として、雷俳句に限らず今世上にもてはやす、(梅の春)てふうたひものは、原作侯の由である、さればうたひ出しより半まで、長州の事を表し、以下江戸にうつるにても、思ひあたられる。

▲俳諧と出版物

初に申した齋藤徳元の初學抄以來、江戸上板の俳書もあるが、江戸何々と表題に冠りたる部をしらべて見るに、

江戸水道 著者 松江維舟 延寶五年板

江戸新道 同 池西言水 同 六年板

江戸廣小路 同 岡村不卜 同 同年板

此後編は、向の岡集で、次は續の原集也、不卜は江戸堀江町の人で、身分も學識も在て、茲に初て江戸の人が、上板したのである。

江戸八百韻著者 高野幽山 同 同年板

此幽山は、松江維舟門で、藤堂某に仕て、江戸本町河岸にしばらく住し頃の上板で、江戸に八の字を冠せし、八時代として手際である。

江戸十歌仙 著者 濱川自悦 同同年板
江戸三吟 著者 伊東信徳 松尾桃青
山口信章、之延寶三吟と云、同五年の吟にて、六年に上板
信章は後更名素堂也。

江戸蛇の鮓 著者 池西言水 延寶七年板

江戸辨慶 同人 同八年板

江戸大阪通し馬著者林 梅朝 同同年板

江戸俳諧合 桃青判 元祿三年板

江戸筏 著者 水間沾徳 享保元年板

此後編、續江戸筏在、著者 鴛田青峨、同十五年上板、之
等より、(本編後編とも)江戸ツ子俳諧ともいふべき、時代に
成つて來たのである。

江戸歌仙合 著者 桑岡貞佐 享保十年板

江戸五色墨 著者 中川宗瑞外四名、享保十六年上板之に

續て、五色墨在、寶曆元年に上板す、

江戸紫 著者 蝶々子 享保十七年板

江戸名物鹿子 著者 豊島露月 同十八年板

江戸名所集 著者 桐淵貞山 享保十八年板

江戸今八百韻 岡田青蘊 同 十九年板

江戸菅笠 著者 立羽不角 元文元年板

江戸時津風 著者 反故齋果然延享二年板

江戸新八百韻著者 馬場存義外三名 寶曆六年板にて、紙

も板下も、大々として此時代見るが如し

江戸の幸 著者 交買明 安永三年板

こは往時の、むつちとり、かなあぶら、たつのうら、にな

らびて、初に連衆の肖像を出せし也。中に當時十八大通と

唱したる輩、及買明派の判者の寫真とも云べきを、とり

く、列出してある。

此前後にも、江戸何々と冠せし書もあらう、未板の物も在てあ
らう。

江戸近坂所名集の類は、くだくしければ、もらす事とした。

又元祿以後江戸にて、數部の俳書を著せしは、第一に晋其角、

次に大島蓼太、谷素外の先達、最力強く、今に追慕して、頗

道のたよりとなる物が多い、又俳人外にして、俳事に有益の書

を遺せしは、高井蘭山である、去迎高吟もさかず、如何の關係

やとおもふに、子が外戚の舅に、藤井某、俳號龍鱗庵素月一號

如鷗子といふが在て、古來庵初世存義門人である。此人壯年よりの熱心者にて、種々の事を調査て、遂には存義側判者の一人と成つたが、をしむべし未だ世に知られずして不歸の旅に臨むの際、數年の草稿中、採もちひべきもあらば、何時かは道の童の爲に、著しくれよとの遺言に基き、斯は心切を盡されし由である。

偕江戸何々と、冠る書名中、(江戸大節用海内藏)二卷在、元板寶永にて、文久三年補刻して、高井蘭山増輯云々とし、日本橋通壹須原屋茂兵衛、外五肆より發行した。之幕府時代の太書に

して、江戸と冠りし、出版物の最終である、一見普通の節用集なれど、陰に俳事に便をあたへたのは、二十三門部分中神釋衣食鳥獸草木等をはじめ、部々悉心切が満て、當時座右缺べからざるの書と、心在者はいつたが、幕末世上混雜の際、殊に賣價金一兩以上の書は、容易に買入する者無、終に板元書肆は不利益に到つたと云ふ事である。

▲俳諧と町觸

取合せ奇なれど、故なき事にも非ず、抑俳道にして、景物と唱

へて、物品を高點者に與へるは、類例古今かはりなけれど、江戸時代には、所謂しるし迄に止り、半紙或は扇面、又は道に使用の書類などにて、今の如く、金銀及貴重物品を、授る事はなかつた。衆人望をかけしは、雷落卷の一點のみであつたので、尤も其以前に、左の如き事に因つたのであらう。

町觸

一俳諧點者連衆の内え、褒美と名付、器財等を、かけわざの様に、取遣り仕、畢竟博奕の勝負に似寄、不宜相聞候左様の取遣を定、博奕わざに仕候儀は、向後無用に可仕候。

若密に左様の仕形仕、脇よりあらはるゝにあては、可爲曲事候、勿論有來通、俳諧點者仕候義は、其通に候事。

元祿十年丑十二月

此時は、重立たる點者某を、町奉行所へ呼出しての上、懇々被達た。然して後、町觸に出たるものである。此次に、

一俳諧點者の中、前句附の褒美と名付、博奕に似寄候儀仕間敷云々

寶永三年戌正月

一博奕仕間敷候。并に狂言芝居の野良、并に浪人野良、又

は役者に不出前髪在之者、俳諧致候義、無用可仕云々。

寶永三年戌三月

一富突又は大黒突、或は俳諧前句附、三笠附杯と名附、博奕

ケ間敷儀、仕間敷云々。

正徳元年卯十二月

猶正徳三年同五年、享保三年にも、前句附三笠附に對して、嚴達があつた。同八年に、持に嚴敷達せられたるも止まぬに依つて、同九年に、長文の達にて、若犯者は、其者は勿論、町内及家主、五人組名主に到る迄も、過料申附べく云々の達在しも、

密に芝居町に於て、三笠附を爲したりとて、冬より翌春に至る迄、一町戸締被仰付たとの事である。此折誰人作にや、

節穴の日さしにぞしる今朝の春

大 屋

若水とても去年の汲置

女 房

初音には過料貧家と囀りて

店 衆

三笠の露に袂かわかず

同 妻

能ひきて詠めんものか島の月

本 人

法度身にしむ切口の鹽

同 類

として、町内最眼に付易き家の、門戸に張られたものである

さうな、之享保十二年正月也、如上の如く、再三の嚴達在も、其所行不止は、最初奉行所に、被呼出たる重立し點者の、取締上不宜様に見ゆるが、決してさにあらず、當時俳諧點者と、三笠附前句附の點者とは、全然性質が異りて、俳諧點者よりは、彼等を特に輕蔑して席も同じうしなかつた。又彼輩も交を好まず、一種の範圍を作りて、密に惡習を蔓らせし傾向である。奉行所よりは、俳諧上の一部と見做たるも、是又無理不成所にて、其結果、當時の博學者、太宰先生獨語を出して、俳諧者流を、いたく罵詈られたのである。曰く。

(上畧)五十年の前は、唯歌仙として、三十六句をつらね、或は五十韻百韻とて、連歌の如くつらねて、元祿初の頃より、下の句を出して、おほくの人に上の句を附させ、點に第一第二の品を命じて、甲乙の次第にしたがひて、賞をおこなふ、其賞は、或は布帛、或は器物杯、そこばくの直成ものを出す、布帛器物に望なきものは、其直なる金銀を取、此賞を得むとて、貴賤となく、我もくと句を附て、日々に點錢を費しぬ。是ぞ則、博の類也、此事盛んに行はれて、世の俗人、皆是を好む程に、下の句に上の句を附るをも、なほむづかしとて、宗

匠より、上の句初の五もじを出して、次の七もじ五文字を、諸人に附さずる事になれり、是を冠附とも、笠附ともいふ、斯いやしきわざに、なりぬれば、下部のわらはげすまでも、俳諧といふ事を知りて笠附して、褒美とらんとする程に、詞いよく、賤しくなり、寶永の頃より、冠の五文字を、三ツ出して三ツの冠に、各七文字を附させ、勝負をわくる事在、是を三笠附といふ、是いよく博奕に近し、其後、五文字の冠をも出さず、下の七文字五文字の、詞をもやめて、唯数の文字を封じて、外より此數をはかりて、札を入れて、其數の當るを勝として、金錢を

とらする事になりぬ。

こゝに至りては、正しく博奕なれども、本の名を存して、猶三笠附といふ、此三笠附盛んに成て、賤しき者はいふに及ず士君子も是をなして、徳つかんとする程に、徳は付ずして、多くの財を費し、身を失ひ、家を亡す者數を知らず、此事上に聞えて、享保の初より、きびしく三笠附を禁ぜらる、其後禁を犯して、刑罰にあふものあれども、今に至るまで、猶たへずと聞ゆ、和歌の流れ、其末變じて、博奕となるべしとは、住吉玉津島の神も、いかてしろしめさん、淺ましく悲しきは、俳諧のわざはひ

ならずや。(下畧)

先生のいはるゝ所、至極理の當然ではあるが、前の奉行所と同意にて、一概に俳諧者流と、見られたるこそくやしけれと、當時咄し輩も在つた由である。結局内部の分割を知らざれば、さも在べしてある、次文政度に至り、和學者齋藤彦麻呂翁、醉中五論を以て、正風俳諧を論じられたが、曰く。
(上畧) 後世に至りて、芭蕉庵桃青と云し、をこのもの、俳諧の二字の、趣意をも辨へず、俳の本意を失ひて幽玄にのみ、かゝつらへり、其門弟に、晋其角と云しは、正風を辨へて、

いにしへに、かへさむとしつれど、果さずして、身うせしはをしむべし、雪中庵嵐雪と云し者、終に桃青が僻流を、世に弘めたり、さる故に、今の世の、俳諧師といへる者共は、俳諧の二字の義をも辨へず、古代の眞の俳諧をも知らず、芭蕉一人を、大祖の如く思ひて、生る世の限り、はかなきおよづれ言云て、心をやれるは、いとあさましき事なり。(下畧)
太宰先生の趣意とはかはれど、當時和學者は、とにかくに俳諧者流を、賤しめたるの論より證據である。要するに、皇國に生れ出て、歌道に入らざるは、人間に非ず、否人間として、扱ふべ

からずとの常言、自らこゝに出たるものであらう。
本文、嵐雪云々の條、たとへ僻流といはるゝを、弘めたくも、
相談相手の、其角歿して、十ヶ月目に又逝いてしまつた。こゝ
に弘める間あらんやと、密に或和學者は微笑したさうである。

▲俳諧と名所及所名

抑も、江戸の名輝て、徳川氏を祝したる、句もあるが中に、
春たつやにほんめてたき門の松
徳元
此等をもつて歴巻とするのなれども、初に云つた、他より來て

ての時代故、江戸にとりては、敢て在がたからず、眞の江戸ッ
子が、江戸を祝したるは、

鐘ひとつ賣れぬ日はなし江戸の春
其 角
松立や箱根を世々の表門
其 沾 州
名月やたゝみの上に松の影
其 角

一は、榮えゆく市の繁昌を、句の上にあらはして、感深いも
のだ。
二は、徳川氏の、武備をつくしたもので、三は、代の泰平を、
うたふの風情、士農工商にわたりて、いづれも他に申さへる

詞がないと云つてよい。

江戸の名所は、第一に、隅田川、上野、淺草、又山の手にも、海邊にもあるが、名句數限なくて、書立るも、却て藪蛇にあたれば、謹んで御免を蒙つたが、唯。

名月や富士見ゆるかと駿河町

全 故

之れ、江戸町名、きまりて以來、駿河町から、富士を見たる句のはじめてあらう。されば其町名に成しものと信じられる。尋常にいはゞ、元日や初空やなど五文字置べきを、明月にかけあはせたる、全故の手柄と云ふべきである、此人本來、素龍齋全

故にて、ばせを門であるが、素龍の名はとほりて、全故を知らざる人が多いのである。先江戸といへば、日本橋と、語のつく場所故、古來之に對しての句も、數吟あるが、中にもぬけたとおもふは、

孟宗が艱苦は、唐の不自由、我國の歡樂は、居ながら孝養を自在す、

雪の日や 筒買に日本橋

鷗叟金羅

何々して日本橋、との吟の感深きは、江戸時代此句を以て終てあらう。子は夜雪庵三世にて、學識も勝れて、安政前後最も芳

名であつたが、慶應三年に物故した、即ち先年歿した、明治時代の四世夜雪庵金羅子の師である。

▲俳諧と豪商及通人

此關係は、元祿の紀の國屋文左衛門(千山)に起て、明治前の津の國屋藤次郎(香以)に終を告た二子とも、末路が甚不感心で、贅稱は出来かねるが、時代の上から見れば、先々一奇人で、千山の事は始中終とも、普く人の知れる處、香以の方は、近世だけに書にも遣らない、人情本又劇場には、變名で出た小本で、

著した物もあるが、自分樂みの樂屋落が多いので他見には一向不明瞭であつた)唯二三其頃交つた人の談柄のみで、俳句は月の本爲山に就て、梅の本と唱いて、家計衰へてから、判者の部に這入つたが、一派香以流とも云べき口調で、吟句も選句も、吉原と芝居道に關したものを好んだ。故に其道に不心得の輩には、わからぬ句が多い。然し、末には旦那藝をはずれて、感じる句も在つた。(句は遊廓劇場の部に掲ぐ)追考するに、紀文後津藤前に、豪商で俳道を嗜む人も、算へればあるが、家憲の嚴敷店向では、質素を專一にして、手代等に俳句は黙評するも

俳諧師の出入を止めた。例せば、元祿度芭蕉門野坡は、三井兩換店の手代、孤屋利牛は、同吳服店の手代であつた。況其主人に於てをやて、此次第故、俳諧と豪商は、江戸にては不適當と見えたり。

借通人と云名稱は、何時頃出来しや不可解ねど、文字の上から見れば、普く世事に通じた人、俗にそつのないと云べきあるう。彼十八大通以來、一風變つて驕奢を旨とし、異なる遊びを競ふことに傾向を有した、末には、破産したものも有た、其中で俳諧に名のあるは、文魚時代少前に在ては、曉雨、此他には俳句

として、出す程の吟のないてはないが、多人數だから煩を避け

た。おもしろき春わすれけり初がつほ

文魚

此一句で、文魚の俳力は充分知られる。師は蕉下庵心祇(稻津祇空門)前名魚貫で、此門には、心の字、祇の字、魚の字、貫の字を、一字づゝ俳號に附た人が多、即ち文魚の出所もここに因のである。心祇の一周忌追善集(明和元年)には、文魚を初として、當時大通と自唱の輩の名も出てあるが、中には心祇門も有らう、跋は大口屋曉雨、後に曉翁が書て殊に補助とある。

此大口屋曉雨は、享保元文時代に、花街に勇名を轟して、通人よりは寧ろ俠客に近かつたのは、近來劇場にあらはれて、人も知つて居る、風流に名の高かつたのと、二代目曉雨の又雅懐在し事を、こゝに告よう。

新撰むさしぷりに、江戸淺草御藏前の富商、大口治兵衛退隱に臨み、(寶歴三年癸酉也、此時還曆の賀筵を、兼たといふ説がある)此書を著した。表紙は武藏野にかたどり、秋草を畫きて、上へ金砂子をちらした、集句は悉く月としたのは、意匠最もよ

いと思ふ。序は無直に、

一日、全史吾に酒殺をす、めて、願ひありかなへよと、あるふりたる曉雨に、何の望みぞ、身に任することならばといへば、その曉雨といふ名をゆづりねといふ、おこがまし

く、いなむべきにもあらず、其上武藏野のゆかりとは、なまめきたれど、いさ、か由縁もはべれば、其望に任せ侍るとて、一句を添はべる。

ほうけたる尾花を人にまいらせん
請て濁さじ水盤の月
十日ほど立秋ながら夏に似て

曉雨改
曉翁
全史
心祇

旅の酒屋は木陰なりけり

隔さへまばらに編るよし簾

一掃はいて風を見て居る

兎 全 史 圓 翁

四吟一歌仙在つて、一卷中最重き、名残の花の座は、兎圓吟である。表六章にして畧す事にしたが、句々とりぐ格にかなつたものだ。

年頃望みし名を乞得て、表徳をあらたむとて、其趣をいさゝか申侍る、大笑可々了也。

武藏野は我に過たる月見かな

望雲亭全史改 曉 雨

此の二代目曉雨は、同浅草御藏前の富商、伊勢屋四郎右衛門の男にて、惣三郎といつた。此人常に黒の小袖對重ねをして大黒天を紋に附て着したといふ事である。

時なるかな、全史このゆふべ、曉翁の前の名を得て、曉雨となる、吾又全史の名を繼て、兄弟にひとしき交りを結ぶ。交りの證據に立んけふの月

連水舎兎圓改 全 史

如何の身分にや、歌仙に、重き花の座を引受け又詞書にも敬語は見えないが、或は公邊にかゝつらう人かも知れない。

斯在つて、曉翁のことばに、

左の人々に、改名の句々を乞ひ侍る事ながら、ことごとくしく、かゝんもいかゞなれば、折からの月の句々をこひて、此冊子の、面目となし侍る。其中にも此こと聞知り給ふ人は、其心ばへを、句面にのべたまふも侍る、穴贄々々。
以下、當時あらゆる名高き、俳諧に關係者を列出してある。俳優には、市川柏筵、澤村訥子を初め、名題以上一同、江戸太夫河東派一同、及吉原連中の名がある。唯一人昔なつかしく加名せしか、曉翁の心中はわからぬが、左の人がある。
下總も武藏の月や橋の上

龜遊

此龜遊は、元禄のむかし江戸に鳴せし、紀の國屋文左衛門即ち千山の實子である。當時築地飯田町邊に僅に住つて、俳道は雨夜庵龜成門にて、後法体して明西といひ安永四年六十餘歳にて歿した、句意は、兩國永代二橋のうち、いづれとも判然せぬが、父紀文零落して後、深川に住つた證據があれば、橋の上の五文字、歡樂極つて哀情多しの感がある。楮末に
夕暮の枝に月咲く今宵かな
曉翁
他書にも此時代（曉雨より曉翁に成し後も）の句々見うけるので、悉くはないが感句が多い、師は誰と記さぬと石霜庵祇空

らしい、俠客にも、通人にも、風流にも、欠點なき上ならず、
書にも巧て在るといふ事は、(享保十二年板閨の梅、之は定家卿
の百人一首に倣て、其中文屋康秀の塲を、曉雨の持て、秋草の
咲亂たる墨畫がある、器用なものだ)句には、

此庵へ千草の現くあらしかな

曉雨 自畫

之等が、曉雨の名の俳書に見えた初であるう、此人の終は判然
しないが、文魚は奢盡して、末は淺草の御廐河岸に逼塞して、
貳間間口の家にすまふ身分と成つたが全盛の夢さめやらず、兎
角前の氣位で在つたと云ふ事だ。狂句に(者の字も大を冠ると

永うなし)實に穿た句と思ふ、然し此文魚形と云貰入に名を
遺して、明治の今日も囊物仲間には、折節名を云れるとは、先
々名譽の部ならずや、之に反して、通人の面汚し、俳諧上には
最負のひいさ倒とも云べきは、三十間堀の材木商で、和泉屋甚
助俳號太申と云つた人で、俳句は諸書にも出て、中には名句も
見えるが、爲す事が一種の物數奇で、約り太申の名を普く知ら
せて、誇らむと云ふ念願で、俳句の選評を我に乞ふ者には、何
々の褒美を贈云々の旨を、部下の輩より廣告させて、其俳卷に
は、五點の句には五夕目の豆銀、十點には十夕目、十五點には

金一步、感吟には小判一兩を、各句の肩に張付て、景物にした
といふ事である。尤豪商の慰とすればさもあらんか、眞面目
に俳句を練人々は、冷笑した由て又は當時有名の家烏石に、
千字文を書せて、何々太申書と落款して、墨本の板行になし、
頗安價に賣せたと云ふ事である。或は道中の雲助馬士に金をあ
たへて、お江戸のナア太申サマハナアと云ふ如くに、追分節を
唄はせたり、数々奇事を試て、末に太申染と云をこしらへて、
其染名は當時の俳優中村傳九郎に襲れて、終に傳九郎染と、市
中にもてはやされた杯は、滑稽とも云べき歟、通人奇を好て、

不通人に成をはるとは、之等の類であらう。殊に此時分の通人
界には、河東節を呻吟て、義理づめに聞せる風習が在つて、定
めて曉翁文魚等は、功者て在りしならむと或書にみえたが、上
手下手に不關聽聞中は、顔を知らぬ佛の法事に臨て、鄭重に
されたと云工合であつた。

▲俳諧と江戸めぐり

昔も今も春秋の日和つゞきには、遠足と名附て、十里以内五里
以上、東西南北おのかじり、一日の足だめしをして、各脚力

を争ふは、抑雅と云心から割出したので、故に拾ひ草鞋で、一代に數萬の富をも足りしとせず、喰ずぎらひに寄附ずて、たま／＼野かげと名を附れば、團子坂の菊人形、宗旨柄ては兩門跡、まだ／＼こゝらは話せる部で、一層下れば風雅こそ貧乏をする基とケナして、一日の遊歩もせず、朝から晩まで金庫の番人、斯云類の都に多きは、古今かわりのなき中に、一生風雅で、金満で、齡は八十六迄も、世をやすらげく、送つたのは、江戸の俳人杉山杉風先此人の次は有るまい、富て奢らぬ一日紀行の眞筆がある。

隅田川みちの記

深川のほとりなる、予茶庵のあたりちかき、隠士うちより、秋野のながめせむと催し、いづくへか立出むといひける、予ちもう所あり、一とせ聖護院の宮御下向の時、角田川の御詠に、

東路のせきやの里に、宿もがな、

すみ田がはらの、あかぬながめを、

と遊ばしければ、此里をたづねがてら、すみ田あたりの野を分むと、ちいさき舟に竿さしせ、あさくさ川にのぼしける

に、岸ちかく舟とめて、色黒き男腰だけ川に入り、うつぶけ
になりて、水底の土を抱あげ舟に積、世のわざといひながら
秋の風身にしむ比、水にひたり、くるしむあはれなりければ、
土とりよ何ほど冷る秋の水

杉 風

川づらに舟かけならべ、釣たる人かぎりしられず、岸にも
立ならびて多し、此興にさかづきをとりて、

友 五

我酒のさかなにこはむ釣のはせ
川岸を見れば、山里の炭がまのごとくなるをつくりて、瓦を
こめて焼其の烟たちのぼり、そらにくもりければ、

瓦焼けむりは霧にまじるかな

滄 波

あなじのき端につゞきて、土をこね瓦つくりならべて干けれ
ば、

焼ぬまは露やいとほむした瓦

杉 風

舟さしのぼすほど、浅草より牛島へ行こふ、わたし舟あり、
うし島の方より西瓜冬瓜茄子、いろくのつくろものを、賤
荷ひてわたしをこゆる、浅草よりはさまくの商人、荷をも
ちてこゆる、其他男女出舟に乗おくれじと、いそぎ走りてう
ちのる、又歴々と見えて、人あまた召つれたる、武士來り馬

よりありて、舟一艘に上下のりて、馬も外の舟に引のせむと
するに、あらげなくはねてのらず、人大勢よりて、漸引のせ
漕出しけるに、川半にてもくるひて、あやうくみえければ、
吹よどめ馬のる舟に秋の風

全

漸里はなれなる岸に、舟さしよせてあがり、野を分るに、
ちぐさの花ちのが色々咲て、見ぬ草の數多かりき。

名はしらす草ごとに花あわれ也

全

といひて立やすらひける、あたりを、をみなへしの花もかれ
たるありける、比しもさかりなるべきと、世にこゝろなきも

の、ありりけると打うちらみて、

莖の色花のかたみやをみなへし

全

なほ分行は、野中に塚ほどの木槿一かぶ、花ざかりにてあり
ける、いづれの里に主やある、いやあるまじきと、あの一
うたがひければ、

手をかけて折らしてさりし花木槿

全

滄波師のいひけるは、あれに田を荻賤のあまた見えたり、い
ざ行て見むとて、哇づたいにはるか行て見るに、荻州臥たる
男と見えて、笠着ながらうつぶけに寝たるおかしさに、

鎌捨てかり干稻をしき寝かな

滄波

刈田に行こふからずを見て、

昔ぶとの落穂をひろふ田面かな

友五

稻かりながら我田人の田の、よしあしをかたよければ、

新ながらはなしは稻の實入かな

杉風

しばらくやすらひて歸るさに、牛頭山にまはり佛前に拜して、

齋堂にまいりければ、机の瓶にあさがほをいけて、眼前のあ

はれに、

齋堂にあさがほいけてあはれかな

全

なしく歸りけるそれは車、これは舟なりと打わらひて、草の

戸にかへりて、

野の露によごれし足を洗ひけり

全

元祿二仲秋初三

杉風書

杉風中年より耳しひて、故に交る友も少なく、郊外に遊びしは

なしも、此道の記の他には聞かない、本文一行と話せし様にある

のは、すべて筆談であらう、友五は蕉門弟子傳に名はあるが、

判然しない、滄波は宗波であつて、本所原庭にあつた、後に芭

蕉山桃青寺と成し寺院の住職にて、山口素堂の詩友である。俳

はや夕日漸くかたぶけば、舟に乗てさしくだしけるに、兩國橋のあたり屋形船所せきて、わめく聲あびたとし、としど名月には、かゝることもありけるが、いまだ三ヶのゆふべなりけるにとおもひて、

まぢかねて三日月見るか屋かた船

全

何かとくちずさみ過る程、舟岸に着ければ乗出す時、關屋の里たづねんといひけるを、おもひ出手を打てわすれまじき所を、道すがらの興に乗じて、見のこしはべると、おのゝあされけり、思へば彼清女が、ほととぎすの歌よみにいて、む

は芭蕉に就て學んだ。性質温和の由書にあるから杉風には好友であつたらう、文中士とり船瓦焼等は、今も小梅最寄にては見る所にて變はないが、わたし船の光景は、半異りて殆ど英一蝶の筆を見るようである、此時代の發着場は、橋場と白髻前と思ふ、此杉風外二子も、最初思立の關屋の里を探ずにもどりて、心付しといふに大に趣味が深い、だから杉風も自書して、一卷に遣したのであらう。前とは年隔て、天明より文化頭を專盛にした、堀口沙羅、當時雪門の一人で、八町堀に住居した、幕府の町與力を勤めて、後一子を失ひ、落膽のあまり隠居して、

佛書を好み、傍判者をしたのである。著書もあつて既に沙羅句集を上板して、今も書肆に見受られる。此人一種の郊外遊歩を好みて、雨天を除の他日各所へ杖を曳いたものだ。尤隱居後にて地方へは出なかつた、江戸中隅々あさりし記(面白日記)として、ある中にも、三日續けて花を探しなどは、奇中の奇といふべしである。未他に轉寫なければ記して見やう。

文化七年三月十二日

雨もいとはず風をもいとはず、堤空か戸ぼそを敲けば待得たり一椀茶、

行なりにゆかんさくらの無東西

旅のはなしを笠のはる雨

沙羅 萬化

と、とりあへず申出けるにいでや、淺草の老阿居士を、そのかかしてと、おとづるゝに、けふは茶の湯の約束ありと、それもよし是もよし、

臺嶺下雨の茶持、墨水上雨の花、

みめぐり堤

花守に鳥も來たりしめり道
鍵の手に寺の櫻やさくらごし

羅化

尚ゆきくくして、木母寺ちかきその静さは、

よい雨や人なき花の洞ぶくら

いつまでも夜明のさまよ雨の花

しだり尾のさくら果なし露雫

すみ田のわたり

花さむしうかく雁の立ちしみ

青樓の花

楊貴妃も小町も花の屍かな

根岸

雨ほそし花のうしろの鳩の聲

桃を出て櫻に入るや上り道

感應寺

花の中通りぬけるや戸なし駕

桃さくら降しづめけり大般若

谷中瑞輪寺

八ッ股に雲をつらぬく櫻かな

雨の花一天四方歸妙法

臺嶺

羅 化 羅 化 羅

羅 化

羅 化

羅 化

咲とちるさくらや降と止む拍子

煩惱の雲おさまりて花は根に

十三日

けふは大井の櫻見んと、百慶百李などかたらひ、麻布の巢鷺も約束したれば、早起せんところ懸たるが、おもひの外寝すごして、

花の朝こむらかべりにおこさるゝ

中橋京橋と、真直にいひいづべき風情もなし、はからず眼のとまりたるをけふの矢立はじめとす、

羅 化

踏出しや花屋が八重を初櫻

沙 羅

脇第三と歌仙出来かゝりたれど、満尾せざればしるゝす、

朝のくもりもおもひの外、

堀出しの日を見つけたり朝櫻

百 慶

殿 山

ちりかゝる花に足る事覺えけり

巢 鷺

世の中にほこらぬ花の七日かな

百 李

元船をさくらに繋ぐ日和かな

百 慶

海を見わたし、花をもてあそぶ、殿山の芝のうへに、禁酒の

巢鷺が腰より、瓢の酒をあらはせば、上戸の歡禮がたもとよ
 り菓子とりいだすも、朋友の深切と、俳諧の變化なるべしと、
 あのく興を催して、花のもとに立ことを忘るゝ、
 高低やさくらのおくの花深し
 盃も茶碗の中もさくらかな
 小荷駄の鈴音、長持の小室ぶし、上るもあり、
 此連て行たし花の大和まで
 東海寺
 松杉や蝶のほかには塵もなし

歡 禮 羅

まつ風や月を打また花を打
 大井への道のほど
 菜の花や四角に咲し家の前
 菜の花や黒く見ゆるは寺の門
 なの花や火口のたえし摺火打
 西光寺
 道下手の道うかくとさくら哉
 眞盛り花にこころの寒さかな
 來年の事までおもふさくらかな

禮 鷺 慶 禮 鷺 李 羅 鷺 羅

空見えず地も又見せず山ぞくら
松とたれ楠とはびこるさくら哉

花 徑

近道や馬に踏るゝちり椿
鶯やだまつてつゞく田のこやし

來福寺

天窓うつ髪も付たし庭櫻
色も香も春のものなり八重櫻

ある禪師は、一山の花たやしたまふ、むかしもあるに、

李 慶 羅 慶 羅 李

植そへてうき世にしたり花の寺

ぬるゝとも花のと、おち付て見たれば、

雲雪も雨になつたるさくらかな

十四日 雨

けふは小金井へと思立て、起ぬれば雅友月守より一通在、ひ
らき見れば、

○きのふのふみ

雨もいとはず風もいとはず、英氣の出立、終日東北かけての
花ごゝろ、御句々木母寺迄の吟行、堤空もあたらぬ勢ひ、打

羅 慶

揃別而感吟、そろひべつしてかんぎん ちうらやましさのあまり、さくゆよやくほ 昨夕獨歩に思ひたち、
夕榮の長堤ゆふはえ ちやうていうかれ歩行候所、あるき そろごころ 日和になり候より、ひより 人々の心も
おなじ事に群來おなじ ぐんらいつれば、存の外ぞんじ ほかしうか静ならず、されども、けふ來
ずば翌は雪あす ゆきともちらんよと、悦申候よろこびまをしそろ。申捨まをしすてさせる事もなく
候得そろえども、雨の花あめ はなの返かへしとも、御一笑ごせう。
切芝きりしばに手入ていれの見みゆるさくらかな
道みちばたや折をれいたみして若櫻わかざくら
里さとの子この乗のつてゆするやちる櫻さくら
ちるものに木魚もくぎようちけり夕櫻ゆふざくら

植木屋うゑきやへ行細道ゆくほそみちや花所はなどころ

右 月守つきもり

此日雨このひあめをおかして、沙羅獨歩しやら ひとりに小金井こがねいにゆきしに、風雨ふううすさま
じくこうじはて、川沿かはぞへの掛茶屋かけぢやに、人ひとなくも入いりて在ありしに、一
吹強ふきつよく此虛家このならいへとともに、河中かはなかに飛とばされて、大なる失策おほい しつさくに、這々はよく
の体ていにもどりし事こと在あつて末すまに、

此まゝこのにずいと行ゆくなら花佛はなぼけ

沙 羅

とある。月守つきもりは沙羅しやらの相役あひやく、殊ことに無二むにの俳友はいゆうである、神田造酒かんだみき
右衛門うゑもんといつた、萬化ばんくわは深川ふかが油堀住あぶらほりぢゆう金井文助かなむぶんすけである。其他そなたの人ひと

々は、門人又はゆかりのものと思われる。

▲俳諧と花街

先吉原で、此起原を調た書も数あるが、區々であつて、吉原起原一覽とも云べき物はあつても簡略に過ぎて、委しくない、こゝに大岡越前守町奉行勤役中、吉原町名主共へ、開基の次第を訊た節、書上の案文がある、これはさし向て、俳諧に必要ないが、後に幾分歟の参考になれば拔萃して置く。

吉原町起立の次第、御尋に付奉申上候

一慶長年中は、御城下に相定り候傾城屋無之、三軒程も所々に分散致罷在候、其中に軒を並べ集り居候、場所三ヶ所、

一麴町八丁目 傾城屋十四五軒

一鎌倉河岸 同斷

一大橋の内柳町 同二十軒

右大橋の内と申は、唯今常盤橋御門の通を大橋と唱へ、柳町

と申は、道三河岸の邊に御座候、其比京都萬里小路の馬場と

申所に、傾城屋在之候、是は原三郎左衛門と申者、天正年

中に相立、柳町と申候、其入口に大木の柳二本植て有之候。

故此町の名主柳町と號申候。右柳町の傾城屋共は、御
江戸繁昌に付、駿河府中彌勒町より引越申候。麴町傾城屋共
は、京都六條の傾城町より、引越申候者共に御座候、御江戸
繁昌に付、伏見幸町奈良木辻より参り、所々にて二三軒づ
、傾城屋仕罷在候。
一慶長十年の頃、御城御普請御用に付、柳町の場所被召上、
此所の傾城屋は、悉く元誓願寺前へ引越申候。此時分多く、
屋敷替の御沙汰度々御座候間相談仕、町々に分散仕候
に付、傾城町の場所取立申度由、御訴訟申者候得共、御免許

無御座候。
一其比、庄司甚左衛門と申者、始て御訴訟申上候趣は、京
都大阪駿河其外諸國の津港、惣而繁昌成場所先規より御免の
傾城屋町、二十四ヶ所在之候、然る所、御江戸日々繁昌に候
得共、定たる傾城屋町無御座候故、所々に分散致罷在候。
如此御座候而は、御町中の爲にも不宜由申上、并に三ヶ條
の儀を以御願申上候。

三ヶ條の覺

一遊女を買遊び候者、遊興好色に耽り、身の分限を不辨家財

を費し候。其上不斷傾城屋に入込長座仕候得共、傾城屋の儀は、其者より金銀だに申請候得ば、幾日も留置馳走仕候。然る間自分其主人親方の奉公勤をかき、剩引負押領仕候事共も、傾城屋共金銀有限、幾日も留置候故に奉存候。一ヶ所の場所御定被下置候はば唯今以來、傾城屋共を一ヶ所に集め、自今一日一夜の外永留被致申間敷候。一人を勾引候者の儀、前々より御制禁被遊候所、今に於在之候。當時御府内に於而、手前困窮なるもの、娘を養子と名付、成長の後妾奉公又は遊女奉公に出し、大分の給金を取渡

世仕候。個様の者見めよき娘を、五三人づゝも養子に仕候、四五歳にも相成候得者、右の如く奉公に出し申候。實の父母より申分來候得者、種々偽を申、少々の金子を出し申含め、實の父母相果候歟、又は遠國杯に罷在候得者、己が自由にとり申候。傾城杯に賣出し、大分の金子を取申候。ケ様の不届者共、人を勾引候事も可仕様に奉存候。如此の譯をも改め、勾引者養子娘を相對候者、傾城奉公に召抱候。趣に及承候、傾城屋共一所に召集申候は、勾引者の儀は、養子娘の筋吟味仕左様成者を奉公に出し申候は、急度御

訴可申上候事○

近年世上御静謐に治り候得共、濃州(關ヶ原)御平均も程近
に御座候得者、自然の透間を伺ひ、悪事を相企可申候諸浪
人も、可有御座と奉存候。左様成悪黨の類人の目を忍び、
住所をも不相定流浪致し可罷在候。遊女屋の儀は、金銀をだ
に出し申候得者、幾日も留置申候。右の如くの族も、所々遊
女屋に可罷在も難斗候。此外當座に於て、不届出の欠落
仕候は當分の住所無之、遊女屋にかたまり罷在、假令
御詮義の者たりとも、容易に御手入申間敷奉存候。此度

奉願候通り、傾城屋町一ヶ所、被仰付被下置候は、此
儀は殊更念入何者にても、不見届者傾城町に入込候は、其
者出所吟味仕、彌怪敷奉存候は、御訴可申上候事
右の通御訴訟申上候得者、其筋の町御奉行米津勘兵衛様と
承り申候。御評定御吟味の上、被召出本多佐渡守様御出
座、追而御吟味の上、可被仰付旨仰渡候
元和三年三月と申傳候、右甚右衛門義、御評定所へ被召出、
本多佐渡守様其外御奉行様御列座に而、御訴訟申上候通傾
城町の義、場所被仰付候間難有可奉存候旨、被仰渡、其

節甚右衛門に被仰付候者、傾城町の場所に被下置候上は、江戸町中は、不及申に端々に到迄遊女一切差置申間敷候、若左様の者在之候は、右甚右衛門并に傾城屋役目として、急度奉公所へ御訴可申上候旨、同時に被仰渡候（此他數ヶ條在りやくす）
右新吉原開基の次第、甚右衛門より相傳り候、日記焼失仕候故、月日不分明私親共心覺書記置、或は語傳候趣大体如此御座候以上。

享保十年己七月

新吉原江戸町一丁目

思ふに江戸入城以來、十年前後は未だ血腥き風が吹て、上下人心不穩の機に臨んだ、願意の筋立がやらず逃さずて、實以妙案と云ほかはない、其後廓の場所は變つても、此甚左衛門親父の名が、明治の御代迄橋に成て輝くとは、其所行凡ならざるを推して知るべしである。
抑庄司甚左衛門は、初名甚内で、十五歳の時相州小田原から、江戸へ出て、其頃の柳町の所縁に掛人と成て、后此創業を、思ひ立たたので元來は武門の由に聞いた、見込通成功して、一廓

名 主 又左衛門

の名主とちふがれて、綽名を（オヤヂ）と衆人に云れたのは、
時の奉行某が才の非凡を愛して、異名に（キミガテ、）とすべ
しと内命の由で、文字には、親方又は遊女の長とも書てさう讀
んだといふ事である。又甚内が、甚左衛門に成たのも、私事で
はないので、或時某甚内と云悪黨と、出入事の未の番所沙汰と
成て、（今の裁判所）捌に臨み双方同名にては紛しと在て、奉行
の指圖にて此所に改名に及て、異名のさみがていと云は、高
尙にして俗輩にはわからぬのみならず、唱へにくいと在て、逐
にオヤヂと呼べば、ウンと答て廓外へも知れわたつたといふ

事どある。場所は初て葺屋町で、（今日本橋區堺町の向ふ）二
丁四方を被下地と成た所が、今も葺町と名の在如く、當時は葺
茅茂生つて、此地ならしに元和三年から取掛つて、同四年の十
一月に普請總出來て、江戸町一二（此名は江戸に初ての遊廓開
基に因る）京町一二外に、角町此分遅れて、寛永三年に町作り
をなしたと云ふ事である。尤も京橋の角町から、十軒ばかり轉
じたので、茲に五丁町といふ名を生出して、四十年程経て、明
暦に今の吉原と、（元は葺原）彌端に押入れて、却て舊に倍し
た盛り地と成たのが、何の件にも引合に出され、否縁故の深き

元祿前後であらう。此年號が出る、俳事では其角と來る順で、之れ萬已を不得ともいふべきであらう、故に當時廓内の光景を、俳句よりして市中へ廣めたは、此人の最力によるので、のみならず今の世までも、子の句に就て參考にせらるは、俳人中の大通たる證ともいふべしである。

土手の馬くはんを無下に菜摘哉

其角

此句など、子が吉原へ關係して、未だ日淺き頃の吟であるが、されど一句の上が、題は若菜つみと知れさても、其ころか容易に解ぬ、吟の部になつてゐるが、左に、

昔時は、淺草日本堤に馬ありて、遊客のために貸たりし、それを土手の馬といへり、くはんを無下にとは、觀音の裁入也、此詞は長嘯の記に、(いかなれや、野邊にかりかふ淺草の、くはんを馬のはみのこしする)といふ歌をとりて、つくれりとぞ、五元集に記の詞は前書にかきて、其時をおもひいづると見ゆ、句につくれるころは、馬のくふべき菜を、むざと摘ことよといへるならむ。之れ八朶園寥松の解釋である。

今一句之に對する吟は、
袖裏や茹よりげに白くより

其角

前は廓通ひの馬で、後は乗てゆく遊客であるので、とばかりて
はやはり解ぬが、左記を見て當時を考られる。

(吉原戀の道引、延寶六年板菱川畫大本一冊)に三谷馬駄賃附
に曰、三谷通ひの人、白馬白鞆白草の袴、白く、りの袖べり、
すべて白きを用ゆとある。

所々より吉原迄の駕賃附の事

- 一 日本橋より大門迄、並駄賃、二百文、馬士二人小む
ろぶしうたふ、
- かざり白馬の駕賃、三百五十文、

一 飯田町より同所迄、並駕賃、二百文、馬士二人右同

断、三百五十文、

一 浅草見附より同所迄、並駄賃、百三十二文、

馬士二人右同断、二百四十八文、

(小歌惣まくり寛文二年板)に、春の日の糸ゆふ柳、たをるは
誰人ぞ、白き馬めしたる殿御よ。

いまもよく歌舞伎に出るが、六方丹前の衣装に、白襟白袖口
白帯を用ゆるが、皆古風の遺つた證據である。

初なすびの紫よりも、此所へ來るには、白をめてるとの句意が

わかる。(朝あらし馬の眼てゆく頭巾哉)之も其角の句だが、前の二句から見ると、遊客の朝がへりと解ずに、直わかるもをかしてはないか。馬を腕車にかへれば、明治の吉原堤にも毎々見受る所である。

儲吉原の俳諧は、其角にひろまつて、享保以後は、貴志沾州此門より岩本乾什出て、寶曆前後を賑はした、猶半局庵逸志がある。其他遊女傾城にかぞふるにいとまがない。文化文政に至つて抱一上人俳名屠龍出られて、俳風が復古した。是又其角信仰の一人で、文化度百年忌に百枚の畫像を畫て、同好者へ配布し

た、今稀に遺つてゐる、人も知る姫路侯の二男と生れ、故在町に住ひ、遂に廊通の一人と呼ばれ、其全盛いふまでもない、吉原十二月一卷の中に、(上人自畫讚)卷序は隸書にて四字あり。

花街柳卷

元日やさてよし原はしづかなり

みよならぎ初のうま

當社の御額は、廣澤老漁のくろすけ

いなりと、七字を記せり。

青柳や稻荷の額のあふな文字

京町二丁目に跡をたれて、いにしへ

晋子、蒼稻魂の三字を書き、鳥居に

かけおさけるが、池魚の災にて失ふ、されども、予其額

うつし置たれば、初の如に作り改めて、また社頭に掛ぐ、

其外超波が、

初午や大黒舞は飛鳥川

などいへる秀句、あまた額面にのこり、什寶になりはべりぬ、

夜ざくらや宮提灯の鼻の穴

樓上に居つゞけしたるあした

起よけさうへ野の四つぞ花の雨

仲の町の後朝

錢賣ののぞいてゆくや朝ざくら

蜀 魂

ほととぎすた、有明のかゝみたて

竹川も穴蟬も暮やさつき雨

水無月一日参詣の人々を見て

これよりして御馬がへしや羽織富士

乞巧奠

袖ふるはくるわの軒や星の竹

かさぎの橋場をわたれ星むかひ

地にあらばふたまた蘿蔔天の川

俄

としぐのことながらおもとが、獅子の音頭聞たびに、め

づらしく、誠に廊中の伽羅なり、

獅子の座に直るや月の音頭とり

京町あたりの、奥座敷からからさしのぞけば、

雁も田に居馴染ころや十三夜

飛ぶ駕やしぐれ来る夜の膝かしら

来ぬ夜鳴千鳥や虎が裾模様

酉の日や敷の寶を驚づかみ

八ッ橋やながるゝ年の疊臺

君平が占もあたらず大三十日

此としもきつね舞せて越にけり

當時見立七坊主のうち巻軸に鼓吹せられた、

道樂坊主

抱 一 上 人

◎◎侯の伯父所々に在住して、光淋風の晝をなす、佛門に入といふ、名目ばかりにて不斷は大門に入り、次は、安政度に今紀文と人もいひ、己も其ころて、遊廓に入浸し津藤の香以てある。

吉原百句の中四季

廊見る扇びさしや春の人

首ばかり出来た禿やほととぎす

曉傘と申されし、晋子が寢覺もさることながら

花の雲さそひし鐘も夜長かな
輝を泣く禿いたはるかむろかな

▲俳諧と俳優及劇場

俳諧と俳優の關係は、最古いもので、今も俳名を、藝名に用ゐるのでも明かである。古來名題昇進、上り下り御目見得の前披露等に、扇面或は帛紗に、必俳句を配るにても知れて居る。抑此道の長者市川才牛より、代々俳道を學ぶるはない、其枝葉にいたつても、昔は心がけ在つて、俳名諸書に見受けた。才牛、柏

延、三升の三世、又五世反古菴白猿、七世子福者白猿、八世は
早世であつたが、感句がある。九世三升も壯年より道に入つて、
紫扇の頃からの句が、澤山ある。其他の句も初訥子杯も頗多
い、俳書としては、才牛追善（父の恩）之俳優追福を、集冊と
した初であらう、次が澤村訥子が（師の恩）明治に至つては梅
幸叟が、（祖父の恩）筑仙老人が（恩）新古をとはず、恩の字に
對してや集中周到して皆美本である、近きは故市川團藏三猿、
大谷友右衛門紫道、岩井半四郎紫若、市川門之助四葉、中村仲
藏秀鶴、壯年にしては故市川女寅、此他にもあらうが先に

二三云へば、
あはす手の重なるかげや玉柏
みちのおくに赴とて、
米買に出る間を頼む蚊遣り哉
明治四年四月十七日、東照宮を祭とて、
空低き水の重荷や花菱
朝がほやをしいところへ葉のかゝる
同 悴女寅
近頃俳優中孝心に名高い、八代目三升が名残の吟がある、句中
にこゝろ根みえてあはれがいと深い

父なつかしく、上坂のうらしばし御名残ををしむ、
浪花津へ旅出や花にきげん聞
三 升

まだくあれど略す事とした。壯年の俳優諸子ちと心がけては
いかゞの蓋し俳名に對してである。何人の作か不明なれど、芝
居を一卷の歌仙にしたのがある。天明末或は寛政初なる歟不分
が、おもしろいと見たので記す事とした。されど明治の好劇者
から見てもハ、ア成程といふ所もあるから俳優と同じに、芝居
と云ふ物にも、時勢の變例他より遅いとみえる。

芝居歌仙

大入と空にも云のれ雲に鳥
枯枝は花に二のかはり咲
朝々の心長閑に鈴聞て
作りが貌はしすましたかほ
鯨身に真鍮鐔の月の影
新酒階の三階へ來る
ウ秋もはやさびて出代る沙汰ばかり
編笠に氣の動く仇後家
代筆と聞てよくさの戀もさめ

つかひてのある 閏霜月

おかしさは 噓こらへる 馬の腹

重い 藝鐘のとほる 人込み

京でうれ 大坂でうれ 江戸で 猶

陰と日向に 書し 吉の字

はつ 春を 二度目の 春にあつかひて

むかふ 棧敷に 火繩霞ませ

糸付て 引けば 凧にも 似たる 月

飯くひ かけて 唄うた ひたつ

ナオ 開帳場から 座元への 状が来る

土用 休みかひるの 家根船

五十でも 有ふと 斗りその 若さ

小性 吉三とは なす 重忠

濡れも せず 吹ちる 雪の 降かゝり

ひよつと 着當た 染に 名が付く

跡を 出さく とて 未だ 出さず

古い かつらの 薄ぼらける

いやしさは 月見の 發句 賣歩行

裏は武士めく窓にはつ雁

居並ぶと女房の方が男がほ

けふ改めの脱捨る伊達

ナウ煎餅によび餅によびはやり出し

皐月下旬は恩のある雨

來れば來る鼠木戸から猫脊中

進上とある幕の引はえ

咲くて花道なりぬ道もなし

附拍子よき董たんぼぼ

この歌仙一卷を以て一先づ幕とするが、以上述べた處で、略江戸に於ける俳諧趣味の沿革傾向を観察する御参考に多少はならうと存するが、尙洩れたる點は他日より以上の研究の結果を増補訂正致す心得である事をお断り申して置く次第である。

△俳諧八百八調

新年

鐘一つ賣れぬ日は無し江戸の春
目には見ず萬一枚を御代の春
世の中の榮螺も鼻を明けの春

其角
同同
同

物申す團十郎やけさの春
荒事や一目にきつと四方の春
天窓や亥の一番に明けの春
鶯や新玉のその玉の咽喉
新玉の春衣きつれて酔つれて
古近江を床の飾りや花の春
さやしやな手に猪口の柳や花の春
歳旦や唄その儘の江戸景色
歳旦や白粉うすき江戸藝者

屠龍
水蔭
無漏
燕葉
紅子
燕子
無漏
如虹
丸一

初空やその薄色の三枚着

初空や羽子にそくさ柳橋

初鷄や先づ金遣ふ謀計

深川や假宅百戸初がらす

元日やさてよし原は静か也

花街

松は皆人に植えたる二日かな

棲とりて二日の松や誰の真似

初東風や卵詣の舟、柳ばし

紅 葉 迂 外 龍 雨 屠 龍 同 燕 知 十 子

初東風やみだれし鬢の横顔を

初東風や不二見下して梯子乗

初東風や佃へまゐる舟の人

みやこ鳥嘴の先から初霞

なつかしう昔めきたり初霞

御降に紀文がちらす小判かな

蓬萊やあいた藝者に汗粉餅

輪かざりや抱一が匂を柱かけ

むき合ふて淋し貌也松かざり

無 漏 鳴 知 同 竹 霞 燕 迂 龍 雨 十 雪 冷 山 子 外 龍

門松にぞめきの塵や初紋日

前書がありて句は無し松の内

茶柱に雪踏のぬしや松の内

半徳が着たくなる也松の内

松過ぎや失せものありて梅花易

永機老人追悼

松過ぎの松風寒き閑爐かな

若水に松魚の躍る涼しさよ

若水や江戸に住ひて車井戸

迂

知

無

燕

知

同

其

香

外

十

漏

子

十

十

角

村

初夢の猪牙やまことの寶船

初夢や額にあつる扇より

萬歳や十三文の足拍子

年玉や利かぬ薬の醫三代

鳥追の昔もやうや梅に鳥

鳥追の足袋の白さや川向

破魔弓や當時紅裏四天皇

葛飾や江戸を離れぬいかのぼり

がらくりの首尾の悪さよ風

屠

其

存

太

屠

同

其

其

太

龍

角

義

祇

龍

角

角

角

祇

切風や柳を這り梅を抜け

されいかや淺茅か原の草の露

羽の子や落ち來る空の筑波山

羽子板や春の句を裏に女文字

羽子板のうつや風ほど柳腰

羽子板の誰買ふならむ五人立

橙に突き當りけり獅子頭

曉の木遣うれしき出初かな

江戸の水三代うけて初荷かな

屠完蓼知紅同松麥迂

龍來太十葉字人外

足袋屋から足袋はいて出る初卯かな

卯詣や春着きつれて柳しま

梅咲くや鷺仁右衛門が福笑

聽ぞめや女にひかせ河東節

金平も酔を吹かれて初芝居

荒事の目にももの見せよ初芝居

紅鐵漿や誰に見しよとて初芝居

初曾我や五郎が肌の緋縮緬

曉の鶯替て來た袂かな

蓼無屠迂成知無龍紅

太漏龍外美十漏雨葉

彈初の女によろし汁粉もち
彈初の江戸鶯を襖越し
初買の紙入を投げ出しけり
初買の小袖にかゝる鱗かな
初賣の市獅子舞の囃子かな
初場所や積樽に見るよべの雪
竹籠に春七草や梅屋敷
七草や隣から来て一と囃し
七草もうちまかせたる妻かな

知 雨 燕 紫 碧 迂 知 屠 同
十 紅 子 虹 童 外 十 龍

七草の俎にちり鯉料理
盛鹽の火焰玉屋や飾り夜具
積夜具や白丁提げし茶屋の者
積夜具や松にかゞやく初紋日
蛭子紙掛とり帳の三枚目
店の衆が今宵茶番や藏開
お汁粉を還城樂の袂かな
お座敷は杵屋が絲で藏開
指物に利齋も挽くや今日の松

知 蘭 雨 無 其 西 其 迂 屠
十 夕 紅 漏 角 男 角 外 龍

春の幕明きや小松を引道具
簀入や一つはあたるトや算
やぶ入や早いに碌なつらは無し

春

春立つや瞳よき子の黄八丈
向皿如月ちかし柱貝
春風や長吉やアの船よばひ
春風の苦みや少し蜆汁

同 哲 燕 迂 同 其 同
同 阿 彌 子 外 角

新道の裏の裏ゆく春の風
江戸褙の褙とれば褙に春の風
春の風日本橋より吹き初めて
端居する妹や東風吹く洗ひ髪
霞から産み落しけり筑波山
霞む日や橋場はなれぬ都鳥
蜜豆の屋臺に春の霞かな
しめ鯖に落すポンスや春寒し
紅を解く棗の裏や春寒し

燕 知 寶 木 屠 無 凡 大 知
子 十 水 居 龍 漏 々 西 十

椿解けば博多が鳴るや春寒し

春寒の人通るなり白魚河岸

春寒や兜町からふところ手

春寒き置手拭や佃島

着奢りの藏前衆や春寒し

春寒やくるもじ噛めばほろにかき

暮遅き四谷過ぎけり紙草履

大だるま小だるま肩に暮遅き

春の夜の梅は綾なし鼻自慢

時雨郎

紅露

龍雨

柳湖

柳子

丁山

芭蕉

龍雨

屠龍

同

縁面坊

燕子

太祇

甲羽

無漏

成美

屠龍

知十

春の夜を長き禿が返事かな

大江戸や春の夜遊ぶ町火消

朧夜の帯のゆるみや懐紙ちる

遇ひ見しは女の賊すりやちぼる月

田の助は駕て歸るよ朧月

木母寺の濡れ鐘さくや朧月

陽炎の中に立ちけり棒遣ひ

春雨や筏になりぬ竹返し

邯鄲の末をひとくさり春の雨

爪掛に下谷の泥や春の雨
版元へ春雨傘の一九かな

すみだ川閑居

真夜中や川に聲ある春の雨
行春の袋比らめや餅かつほ
ゆく春や小雨にけむる待乳山
ゆく春を孕み白魚のやつれ哉
初午や霜解道の竹筏
初午や犬に嗅れな此趣向

禽 一 無 屠 迂 屠 龍 屠 同
化 樂 角 龍 外 雨 龍

初午や一日雇ふ田樂屋
初午や二つ瓶子の黒羽織

五十間吉徳稻荷

初午や乗打させぬ此の社
初午やけふをはじめの手習子
書馬かさや初午の日の走り筆
初午やさて御肴は焼豆腐

よし原

初午や賽錢よみは芝居から

屠 同 同 同 同 屠 同
龍 龍 龍 龍 龍 龍 龍

初午に狐のそりしあたまかな
初午や切れぬ鍛冶屋も朝参り
初午や娘見たさに相の森
唐棧の疊のへりや二日灸
雪踏はく帯のゆるみや二の替
供待の六尺四人若菜摘
裏白は春のものなり蒸し鯉
雨華庵の朝酒盛りやむし鯉
寒詣翔るちんちん千鳥かな

芭 柳 迂 燕 同 屠 同 知 紅
蕉 居 外 子 龍 十 葉

出代りや格子の外の次きの幕
花の戸や其角を祭る繪蠟燭
其角忌や昔うれしき鐘が鳴る
其角忌の崩れ四五人よし原へ
雛箱を見れば鮓屋の彌助かな
よし原や君が小袖の鶏合
傾城やまつ曲水の様に腰
曲水や茶屋から茶屋へ小盞
曲水の遠慮會釋も平らの蓋

燕 知 竹 迂 蕉 屠 同 同 同
子 十 冷 外 雨 龍

もどかしや雛に對して小盃
曲水にあの氣違は茶碗かな
親にらむ比ら目を踏ん汐干かな
江の島や旦那後から汐干貝
鯛買ふて土産のうそや汐干狩
車ほど舟押す人や汐干瀉
汐干狩比ら目の裏に歌かゝん
馬刀突や尻の割目の緋縮緬
汐風呂に汐干歸りの藝者かな

其 同 同 屠 太 同 同 其
角 角 角 龍 祇 龍 十

梅若の頃にかぎるや花ぐもり
舟で來る白き女や梅若忌
うた心鷗に外れて梅若忌
船頭に洒落た人無し梅若忌
白魚も子持となりぬ捨頭巾
裏河岸や舟へ投げ込む小搔卷
薄摺の死畫臙ろに小搔卷
肩當に櫻小紋や小搔卷
京町の猫通ひけり揚屋町

屠 糸 迂 同 同 清 龍 雨 其
龍 郎 外 香 雨 紅 角

妹と背の忍び返しや猫の戀

うぐひすの身を逆しまに初音哉

鶯よいても見せん杉缺

鶯の子は子なりけり三右衛門

うぐひすに長刀かゝる承塵かな

鶯は物干竿に初音かな

釣臺で鶯歸る屋敷町

鶯や羽織着よなら一つ紋

故常磐津林山に與ふ

屠 龍 角

其

同

同

屠 龍

同

紅 葉

鶯の身を林の中にさかさかな

鶯の番附春の床屋かな

鶯や葛西太郎が蜆汁

鶯や一口に豆腐すゝりこむ

鶯に黄袋の粉をちらしけり

鶯や女役者の初ぜりふ

鶯や黒眼ながるゝ枕元

和藤内の隈取賛

南無三と鶯鳴くや散る花に

同

華 邨

龍 雨

燕 子

東 湖

川 外

無 漏

紅 葉

朝もよひ出茶屋の釜もぬれ燕
乙鳥や手拭懸を摺て行く
傘に峙かさうよぬれつばめ
助六の傘が飛んだり燕
つばくらや編笠茶屋の糸柳
仲見世の裏から抜けて燕かな
江戸拂ひ品川にとぶ乙鳥かな
つばくらや我替紋にくづしけり
燕や瓦の中のこけら葺き

屠 同 其 龍 同 翠 行 知 同
龍 角 雨 竹 人 十

白銀の塵を拾ふや白魚箸
白魚や塵撰り分くる利休箸
白魚やはかりながら江戸の水
江戸にて
白魚やさぞな都は寒の水
自憎落や朝飯おそき白魚鍋
白魚や與兵衛が鮓の四つならべ
牛島は牛より黒し白魚の灯
我戀や都の巽しら魚鍋

屠 同 竹 几 紅 六 鳴 黄
龍 冷 董 葉 花 雪 雨

白魚の須崎にうつれ都鳥
白魚や海苔は下邊の買合せ

市川才半追善一千九藏名をつぐ

塗顔の父はながらや雄子の聲
川上は柳か梅か百千鳥

狂女賛

あれは沓にてこそ候へ都鳥
歸らふか行かうか土手の夕蛙
心を剪る灯のめづらしや初蛙

同 其 角

同 同

屠 龍

同 知 十

雪洞の底の暗さよはつ蛙
一くさり淨るり濟みて啼く蛙

品川や蛤鍋に明けがらす

取上ん雛の盃初かつほ

花の浪乗越て今朝初松魚

俎箸に小判はさむか初松魚

とび魚を飛び越てけふ鯉かな

俎に迂らぬ金や初かつほ

雫して彌生の鯉通りけり

松 字 外 冷 龍

同

同

同

同

初鯉春の名残を鮓味噲かな

壹兩に鼻あかせけり初松魚

胡爪さへ苗で賣る日を初鯉

芝浦や初鯉から夜が明ける

江戸に生れ男に生れ初松魚

一食千金さかや

津の國の何五兩せんせんさくら鯛

蝶とぶや猿を呼こむ原屋敷

聖堂にこまぬく蝶のたもと哉

同 旨 原

道 彦 茶

白 猿

其 角

同 同

御秘藏に墨をすらせて梅見かな

遊大音寺

梅か香や乞食の家も覗かるゝ

さす枝のゆき届かぬや繪馬の梅

進上の闇をかねてやうめの花

仙石殿の御悔申上侍る

外様まで手向の梅を拜みけり

梅ちるや既に宗因矢の如し

草履賣る窓も梅あり屋敷町

其 角

同 同

同 同

同 哲 彌

曙 龍

うめ千の看板白し梅の宿

長松が双紙干しけり梅の枝

鎌髭の奴つくばふ梅見かな

うめが香や爰の巨燧も周防殿

胡摩ぶしを軒端の梅のつぼみ哉

遊べ春梅の鼻毛の延次第

市村家桶の梅王の隈に

飛梅やひるきの中を一文字

梅屋敷にて河東に會ふ

同

同

同

同

同

同

紅

葉

紛れなき江戸鶯や梅に今日

つぼくや春はさながら梅の花

物好きは此の寒いのに梅見かな

二挺臚や梅のなんのと水調子

傾城の賛

青柳の額の櫛や三日の月

八九間空で雨降る柳かな

江戸も江戸、江戸真中の柳かな

朝湯から花屋の柳まづ嬉し

屠

知

寶

龍

其

嵐

一

蓼

龍

十

水

雨

角

雪

茶

太

から傘の骨のたくみも柳かな

飴賣を釣人形や糸柳

鶯にわざとも迂る柳かな

青柳やいなりの額の女文字

いろは長屋

傘てやなぎを分る庵かな

不忍のしのべと門の柳かな

魚市の引けて目につく柳かな

四君子の野暮を笑て柳かな

辻駕の酒錢をねだる柳かな

青柳や湯島に名たる色若衆

青柳や戀を命の柳ばし

青柳の目にちらつくや細紅灯ともし

花さそふ桃や歌舞伎の脇踊

菓子盆に芥子人形や桃の花

沓足袋や鎧あぶみに残る初さくら

本膳を据たばかりや初ざくら

傾城賛

屠龍

同

同

同

同

知

文

小

波

羽

男

樹

漏

角

同

同

屠龍

煙草盆に來て座りけり初櫻

上野清水堂にて

舞臺から飛ぶは此時初ざくら

染付の小皿の鮓や初ざくら

浮助や扈從見にゆく櫻寺

彼是は嵐雪のうそ花のうそ

御用よぶ調市ごうちかへすな花の鳥

花盛瓢ふみわる人もあり

寢よとすれば棒つき廻る花の山

同

同

燕

其

同

同

同

同

角子

花笠を着せて似合ん人は誰
酒を妻妻を妾の花見かな

妓子萬三郎を供して

その花にあるさながらや小盞

尋花

植木屋の亭主留守也花いまだ

花に鐘そこのき玉へ喧嘩買

我奴落花に朝寢ゆるしけり

花の雲鐘は上野か淺草か

同

同

同

同

同

同

芭

蕉

春の花年ンく小唄新たなり

思ひ切て毛氈まくれ暮の花

重箱に鯛押しまげて花見かな

屋形船上野のさくら散りにけり

よし原の鳥籠ひろし夕さくら

梅翁百二十忌

花の日や念佛衆生拙者風情

傘賣の肌ぬき見よし朝櫻

朝櫻裾から寒し禿ども

旨原

百尾

成美

杉風

哲阿彌

同

屠龍

同

足る事をしれや花見て樽枕

花に啼く蛙や雨の隅田川

花びらの舟と廻るや小盃

聞番の提灯見えて花くれぬ

箱せこや矢の字結や夕さくら

江戸櫻花も喧嘩も川向

興盡ぬ花の雪見の日除船

鮓賣の廻りて来るや花の山

廓風流

同

同

同

同

同

同

同

同

仍さくら喜世留の雨も降夜かな

起よ今朝上野の四ツぞ花の雨

淺草の土手を植えけり花の雲

夜櫻や箱提灯の鼻の穴

七代目團十郎助六狂言大入

ちと花が高いぞ江戸の江戸櫻

来て人も見はやせ花の家さくら

山彦の曲や三筋の糸さくら

猶色を十寸見さくらや昨夜の雨

同 同 同 同 同 同 同 同

助六の印籠箱に

花びらも其夜櫻や一つまへ

打残る十八番や花に鐘

紫の筑波新らし花の中

傘の雫かろけ花のみち

夜櫻の廓を流すや文彌節

夜櫻や迷ひは目からちらつきて

朝川や燕流るゝ花の塵

紫の鉢巻は誰そ花の蔭

同 同 知 垂 善 桑 香 同

宇 十 香 孝 阿 以

夜さくらや鬘は本田に抜衣紋

花の雨一枚小袖ぬらしけり

籠の目に簪さしけり櫻餅

松の葉や花の便りをこまやかに

岡惚れの人と酒のむ櫻かな

富本の櫻ねりゆくさくら哉

夜さくらや臙に見えて橋場の灯

連達や湯豆腐に汲む朝の雨

白藤を酢味噌に傳ふ雫かな

西 男

棠 郎

龍 雨

無 漏

同

文 祿

迂 外

春 風

其 角

藤咲て松魚くふ日を數へけり

藤浪や二十七人草履とり

海苔すゝぐ水の名にすめ都鳥

干海苔に小海老見つけて哀れ也

焼海苔や米に奢りし裏長屋

金一分見付けて嬉し露の臺

泥龜の腕とちもへは土わさび

同

同

同

屠 龍

屠 龍

其 角

其 角

夏

初夏や新きう豆のとほしもの
短夜のくもり切れたる枕かな
三弦や寝衣にくるむ五月雨

江戸八景のうち

住へくはすまば深川の夜の雨五月
五月雨やから傘につる小人形
五月雨や數寄屋の壁に先火のし
五月雨のかし傘や國盡し
何を音にずぼん鳴らん五月闇

傾 廊

八兵衛や泣かざるまい虎が雨
夏の夜は寐ぬに疝氣の起りけり
夏の月蚊を疵にして五百兩
御手紙はあとにてひらく氷室哉
夕立や内儀たまく物詣に
夕立や田をみめぐりの神ならば
夕立や法華かけ込む阿彌陀堂
夕立や樂屋をかふる傀儡師

同 同 同 其 屠 同 同 同
角 龍

無 燕 其
漏 子 角

同 同 屠 同 其
龍 龍 角

夕立や袴の紐を泥に曳く

夕立や静かに歩行く笈さし

夕立や大名馳ける間部河岸

夕立や右往左往の合羽籠

助六賛

つけて出す喜世留に立や雲の峰

傳九郎が持ちし扇に

朝比奈の樂屋へ入し暑さかな

涼しさや帆に船頭のちらし髪

磨 龍

同

同

同

同

同

其

同

角

青物に涼しき月の巷かな

二上りの涼しき河岸の月夜かな

水無月の水絶えすして生洲かな

黒鯛の生洲にはねて秋近し

門付の蘭蝶を聴く夏の果

越後屋に絹さく音や衣かへ

法体も縞の下着や更衣

江戸褌に燕飛ばせて更衣

八百八丁人は衣を更にけり

紅

西

知

同

燕

其

同

黄

鹿

葉

男

十

子

角

水

雨

水